

No.416

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

日本儘酒坊

難の清酒

ニホンサカリ

111

柳

維

誌

社

新年の祝盃をどうぞ!





大阪酒坊・ 河堂筋道領堀橋南語東京酒坊・ 八 重 洲 口名店 街

著者が答えているのが本書である。 「関い、今日に至り、将来に動くか、した。 である。その川柳がいかにして発生し、 型、それは伝統的であると共に常に革英型、それは伝統的であると共に常に革英型、 である。その川柳がいかにして発生し、 型、今日に至り、将来に動くか、した。 型、今日に至り、将来に動くか、した。 である。その川柳がいかにして発生し、 である。その川柳がいかにして発生し、 である。その川柳がいかにして発生し、 である。その川柳がいかにして発生し、 である。 川柳と麻生路郎先生

は何か

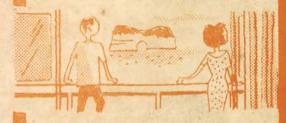
送费上五〇四

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507



TEL 白浜温泉733 大阪案内所 (63)0221



和 8 ゆる 自通列学 なんき1号…………毎日 なんば発 8.10 夜行直通………… グ 22.07 •

のりは大阪なんば 南海 南車

謹賀新春

一九六二年元旦



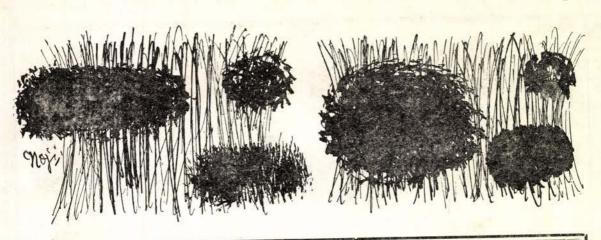
→元旦から心にもない世辞をきき どっかで三味が鳴る明治生れの僕の新春 どっかで三味が鳴る明治生れの僕の新春 中・準楽員業育者 はいかけて談すすべなく合掌す 不朽洞句 hi

郎

川柳雑誌新春号目次

入 不柳各金 同川 法句会と川地 新春放験・ トラ競など不用・ のこと がんげき抄・ トラ競など不用・ トラ歳のお正月 句 路 朽洞の人々: 珠 北堀山集川口路「 洞 IJ 大面病 柳料理曆 講 近 き妙… 逝 自 春塊閑古 • 東東 年 東野元 句 君 自 釈 木田中 藤 波·清 生 中島生々庵… 度乃・中島生々庵 大八・布部 幸男 大八・布部 幸男 清阿 直原七面山 麻生 生 栄 路 35 34 38 40 31 39 11 6 37 24 36 12 28 18 4 19





新 春 放 談

麻 生物

路

郎。

たまるものがある。不思議と云えば 不思議だ。 元旦 には、何んとなく心あら

凡聖一如元旦のこころ知る

となく厳粛さがある。それは、それ という拙吟があるが、元旦にはいつ でいいのであろう。 なゴミゴミした生活の中にも、 も、この句を思い出す。大阪のよう 何ん

正月も昔は紫雲たなびいた

限らない。世の末が近ずいているこ は正月でも死の灰が降って来ぬとは という句も創っているが、近ごろで ないのだったら、知らない方がいい とを知ったところで、どうにもなら ですよと云えないこともない。

K て悔いのない私が、遠暦を迎えた時

対する情熱をたまたま還暦に際して 自身は生に対する情熱、即ち川柳に という句を創った。ところが、日日 ですか」と笑いながら云われた。私 の社長の石井寿一氏が、「あの方も 方」即ち女性に対する恋情の句と見 むしろ石井寿一氏の云われた「あの が、突然この句に接したとしたら、 の感懐として漏らしたのであった る方に六分の強味があると思う。 六十一まだ情熱は燃えに燃え

> とでは解釈の上に多少のズレや、 環境やその個性を、知ると知らぬの

味

わいの深浅さを感じない訳にはいか

ないだろう。

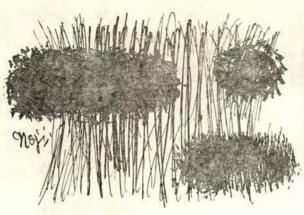
これと反対の場合は拙吟の 行末はどうあろうとも火の如し

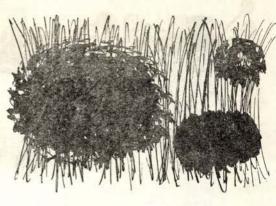
はこの句を何んの躊躇もなく恋の句 である。これは私の壮年時代に、一 女性に対する愛情を詠んだので、私

> として取扱っているが、読む人によ いかも知れない。 やむを得ないことだと云えよう。 七音字に感懐を盛り込む詩としては っては必ずしも恋の句と解釈されな これは小説などと違って僅かに十 その点、作家と句は、その生活や

のほどにか、 ジアが生んだものであろうが、 治は遠くなりにけり」と云う言葉 の言葉は明治時代に対するノスタル に、ちょいちょいお目にかかる。こ 誰が云い出したのか知らぬが 明治アタマは古い、古 明明

三百六十五日、短詩文学に奉仕し





いものはダメだと云う意味にも使わ う。抽吟に れているようだ。もっての外だと思

妻や待たむ靴音を高めんか

新婚者にも斯うした心には変りはな いと思うが、どうだろう。 四年頃に創ったものだが、 と云うのがある。この句は大正三、 アプレの

も終点に近い訳だ。 て、こんなもんだよと云いたい。 よさだとも云えよう。詩人の情熱っ い。そうした甘さの複雑さが年輪の 水のような甘さも甘さには変りはな ぶし銀のような渋い甘さも淡々たる れる訳でないことは知れ切 の気持ちは捨てない。だからと云っ 行末はどうあろうとも火の如し 私も、ここ二年ほどで金婚式だ 私などは今でも、靴音を高めんか いつまでも甘い心ばかりでいら ホロにがい甘さも、 てい

く烙きつけるより仕方がない。 意味がない。想像するだけでもイヤ ない富士山の姿として私の脳裡に深 だから私はもう、彼女を火を噴か しかし、しなべた恋愛なんて凡そ

ま質辞をうけられた。 なんかはご夫婦で、 がウンと残っていた人が は何々株式会社であ 年賀廻りが多くなっ 告的な意味を含んだ び込んで行かれた。 の年賀廻りはだんだ 々金一封をご祝儀

で、やはり朝早くから れそれは、年頭のあ たくないことになる つにも来ないという 祝儀の一封が残って、 挨拶に行かぬと、その い高級社員も居たが、 したのでと、ズラカリ る。中には風邪をひる なって、 お覚えがい

話を変えよう。

る。

テクテク出かけて行

た

6

0 であ

とすぐに年賀廻りに まっていた。実に律 た。父なども、その一 のだ。そしていの一二 いうちから年賀客が 私のこどもの時分 正月も今と昔では 往左往したも 一端座したま して出され リした律義さ 、風の中へ飛 い礼をうける なものだ に来る人はき しと変った。 の社長さん たって、 一、元旦の暗 それでも名 だ。そして や形式的な

生

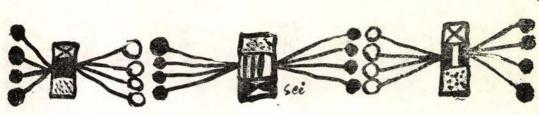
近代的な設備をととのえ



のものしいものであった。 行ったことがあるが、なかなかにも ら休んでスキーへ出かける連中が多 い。私は明治時代に宮家の年賀にも い。近ごろは年賀どころか、早くか たことは云うまでもなかっ 今では、よほどの素封家の社長で もうそんなことは廃止したらし かし、それをうける方も大変だ

換会は自動車の交通マヒで、 らいはゆったりとした時を楽しみた いものだ。 ってしまった。せめて一年の始めぐ りである。 賀状は遅配するし、年賀の名刺交 味もセセラもない世とな サッ

大阪日本橋 松坂屋 TEL 63-1171



機原市 上 H 光

死ぬと云う事の仮定にギョッとする 迷うてるわりに自説を曲げもせず 宗教は論ずるものにあらざるに 西宮市 本多 久 志

堂ビルへ勤めてまんネ夜警です もう一度飲みに来る気は名を訊ね 血圧を言うてた仲間一人減り 大阪市 正 本 客

水

鳥の羽根流れて秋の水が暮れ 人ひとり愛することがようできず 知恵つける人がいるなと笑うとき 高槻市 丸 花

世間なみの世辞ばっかしを聞きなれて 蹴飛ばしたコップは破れもせず転び 愛情が愛情がと生活を考えず 大阪市 西 わ を

何処で聞いても独身のママばかり

耳少し遠いも人間国宝らし 朝刊を寝間へ運ばす年になり 雨の止む予報が当ってはくれず 眼帯で出て眼帯によく出会い キッスくらいは肉体と思うてず 百万円キャッシュにすれば嵩低し

巧言令色停年の社長に消え 独り者脱いだ靴下嗅いで見る 無礼講下戸と上戸とに席が割れ

市

吉 田

#

井

堂

ワイマル

羽佐

間

葉

手をあげりゃ自家用ですとどなられた 勘だけで来たが科学にもう勝てず 死の灰もソ連が上げりゃ黙っとり 横書きの和歌読まされた味気なさ 棚一ツかんなものこもさしも買う 防府市 長 蚌

予告してくる颱風に手が打てず 科学者の火遊び地球を灰にする 容れられぬ不平は無言で席をけり 十代の告白母を悲しませ 岡山県 直 原 七 面

世話焼にまた覗かれた新世帯 良い経験をしたと財布を掏られて来 餌は金女が面白い程釣れて 男の味がこうも女囚を悩まして

巣 定期券拝見どこ見てはるの改札さん アイシャドー自然に見える程に酔 豊中市

大阪市

北

][[

春

上役に敬遠されるへそまがり 八十台がつぎつぎ逝きて淋しゅなる ウインドへ老人らしい影がさし 文士型社業と別に趣味にこり 倉敷市 木 村

引っつけたあとで仲人それっきり 横丁で見ても名月美しい 値下りへやたらに株を買いたがり 石川県 野 村 味 4

縄のれん株には縁の遠い顔 肩をもむ父をひやかす子が五人 女房の夢収入を上廻り 赤旗を立てれば破算する会社 高槻市

故郷のこの道この橋この学校 負けられぬ一戦原価割って売り 五十七新春の大気をぐっと吸 路

身揚りもしそうでひもは動かれず 太族館にて 大阪市 真 鍋 瓢

山椒魚お女郎上りが病むに似て

帰しともないのに淫雨とぎれ勝 大阪市 後 藤 梅 志

足

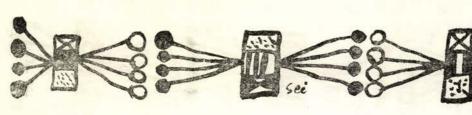
Ý.

春

雄

干 容

大阪市 村 水 洞



味噌しるへ薄い豆腐が素直なり 炭坑の子が走りっこして帰り ドンゴロス張って妾宅すぐに出来 書かんでもいいに芸術祭参加

米子市 西 雄 k

新年へ株の値上りだけ祈り

来年も履ける子供の靴を買い 女にも強いやくざでしめ殺し 一言もしゃべらず降りた一等車

大阪市 Ш 111 m 茶

わての葬礼金だすとニキャラさし 不景気な話へダイヤ無表情 我れ一代放射能雨へ傘軽し 大阪市 金

孝行な人へ嫁かぬと娘はドライ 女社長娘の婿を副に据え 井 文

下関市 桜 111 不 水

適当な馬鹿でうけてる平社員

若いもんにゃわからんテレックテンの酒 あの佳人いもやの爺々に世辞を云い

岡山市 田 久 * 雄

お正月時計が回るから迎え 正月の四日を跳ねるように起き 緑 之助

出雲市 尼

開拓へ呼吸を合わせて進むべし

長男結婚

出雲市二十周年

7

菊人形花のいのちは上を向き 五十路のおしゃべり凄し女秋 又明日へ続く峠に立った市

大阪市 水 谷 竹 莊

祭り酒見合いと知らず酔いすぎる 柳井市 弘 津

横に来て女遠慮のないジョッキ 枕木の柵見え出して下車準備 テレビーで読書の秋をふいにする わめくだけわめけと五〇メガトン打ち上る 慶

清掃車ごみをこぼして行っちまい 委員長報告通りまた可決 鳥取市

目覚しはだめねえと妻揺り起し

京都市

南

曲

秋

独り熱しひとり冷めてく恋もあり 大

追えば飛び追わねば歩く秋の蠅 飼い馴れて家鴨も四五歩迎えに出 初夜の座に妻の権限持ち出され

尼崎市 文 月

余つたので彼にも質状出しておき 真心をこめた質状に墨が落ち 賀状出した翌日転居の通知が来 ひらかなの質状をもらう程に老け

いつになっても受身の姿勢に慣らされて 闘争のビラへ夜勤の活気づき

奈良県

白

否

貧民対策シャンデリヤの下で論じられ 窓々に干されたふとんも規格品 真人間になれとはなんと退屈な ボスの貫禄示したつもりか阿呆らしい 野

光

寄附帳が僕んちだけを通り過ぎ 格子戸がまだらに朝の陽を仕切り 部屋暖めておく係長早出して 岡山県 福 島 鉄

児

忘れてんのと違うか寸志まだくれず 膝へ来る猫の重みも快復期 まだ恋を知らずBG二十八

Ш

法廷闘争被告はスター気取りなり スタッフが決りお岩の墓詣り 岡山市 服 部 + 九 平.

岡山県 大 森 侧 何 楽

読み飽いた雑誌丸めて願を乗せ

東京駅へ愛の小包殺到し 再婚の身に思い出の写真が出 二階級特進で瞑福するだろか

婦人科もままにはならぬまた女 西宮市 若 林 草 ti

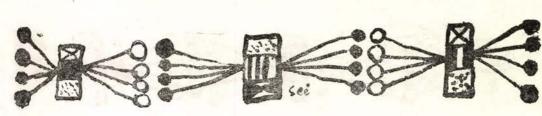
毛のうちに白髪もいれる程に禿げ

エースともなれば汗までうつされる

高知市

大

妻の前うっかり保母さんほめられず 子の幼稚園に出席して



老らくの芸者ワルツをなつかしむ

地図で見りゃもうしばらくと励まされ 広島県 山 H 季 費

岡山県 田 村 波

犯行の動機被告は愛に飢え

無料ではお寺も見せぬ世となりぬ なるほどの連発それほどきいとらず

見島市 本 田 惠 朗

三十秒道をゆづって恙なし 無限の愛角膜しかとゆずりうけ 弁天さんあんたもつまり嫁きおくれ あべこべを教えてしもうた知ったかり

京都市 Ш 杜: 的

子の風呂は長ごても短こても叱られる 平凡な生活を妻は悟り切り か弱い女とは世間もう云わず 鳥取市 森本法泉

子

郎

作州路にて

高原のすすきはここもまだ続き 湯原温泉にて

関の宿ボンボン船におこされる 砂風呂にだまっているは土地の人 美保の関にて

尻に敷く婦人か朝の犬を連れ 倉敷市

見出しだけ読んで朝刊腰を挙げ

いちはやく塾に響いた金詰り

万 古

> 厚い本探して枕にするレジャー 市 高

崎

雄

声

大阪市

木

村

悟

気休めの薬を医者へ頼むなり

使われて主人の財をふれ歩き 恐ろしや顔みたとかで切りつける

片隅で親は飲んでる遊園地 島根県 #

明

朗

貯めてから死ぬ人生はそれで良し

菊畑父の苦心をよう継がず 南活けて待つ仲人の来る日なり

録音え年甲斐もなくあがりよう ラジオの録音に取られて

岡山県 松 東 岸

君付けにされてなんでもお答えし 十代に社説縁なきものに見え スポーツ紙読む問いざこざ忘れとり 補正予算我が家は組むに術もなく 倉敷市 野 Ш 素 身

寵愛を集めよく食べよく眠り 咳ひとつ早速育児の本を出し **躾までは手が回らない共稼ぎ** ラの花つければ来賓らしくなり 大阪市 水

指五本の協力を子も知って居り 放射能を気にする傘は低う持ち 信仰で癒る天理も医者が居り 盲信と云う名子を捨て家を捨て 妻天理教修養会に入信(二句

> 社もつぶれストも終りぬ失業中 間の抜けた一人が職場明るくし 躾なんか問題なしに子が育ち 標準語訛って駅のマイクなり

名案のどれも先きだつもので消え 大阪市 伊 堰

子

十二月借られる心配してみたし 聖徳太子おがんで女へ逢いに行く じゃらじゃらとべんちゃら言うも十二月 大阪市 不二田 一三夫

兵庫県

酒井

0

かっ

¥-

坊んさんも安全帽をきて飛ば 割り込んで顔は週刊誌で隠し 駐在所不作ながらも茸貰らい 芦屋市 丸 111 初

拭いて見て悲しく母の文机 インスタントの非難も云うて主婦の会 たしなみはしつけのままの形見分け ハイテイン昔話へガムを嚙み

用もあり用なし社長の御出動 唐津市 新 尚 天

子

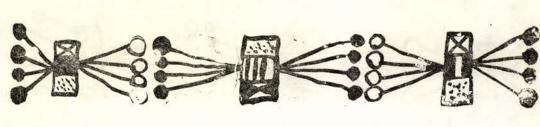
望

修

竹の間から虎はお客を見つめ 岡山県 池 たり 古

心

厘毛にならぬ整理も頼まれりゃ 破産する為に借金した如し



そうですか言へない妻を持つ不遇 大阪府 早 111 清

生

進学した奴に遇うた夜ひと殴る 耳もとでフルートが鳴る恋失い 区役所の平お余りの酔い心地 漁絶えた浜に追分だけ残る ちゃちな模造氷柱でペンギンよ寒いな 海の詩に触れるゆとりが漁婦になし

辻 # 水

作業衣の頃の夫がなつかしく 値上げとは云わずにうすうなっており 名が売れて親の死目にあえもせず

西宮市 浜 牧 人

宝石は転々として罪をつくり 老らくのたのしみ音痴な声を出し たまに出た妻の奢りのAランチ 小キレイな店が持ちたい未亡人

池田市 前 111 左 文字

妻と歩いて人振り向かん年となり ニンニクとにらみ合ってるラッシュアワー 散髪屋で見てたで話が合う野球 逃がしてはならじと女腕を取り 1 レー帽かぶって秋を満喫し

手持ぶさた口実にして編み疲れ あきらめる姿や雨の観世音 橘高

大阪市

薫

風

子

岡山県

池

E

智

惠

美

三文オペラ第二幕へとかかりたり 囲炉裏での話来し方ばかりなり 原始から女の姿水を汲み 句集『三文オペラ』の著者・岩井三窓君結婚

3 嫁が来てずけずけ言わぬ父になり ャポン売り歌に出るほど若くなし 天草、長崎に遊んで

家を出るとこから8ミリとりはじめ 手酌にも馴染み停年間近かなり おくんちが一昨日済んだ石畳 山口県 多田 ほ な 7

奈良市 宮 笛 生

座布団の長さで足りる児がねむり 玄関に菊一鉢を置いて留守 音悪い柱時計も吾が家なり 大阪市 桝 本 路

児

ガムを噛む事も真似てる草野球 サロンパスはって女房ももう四 古物屋の瑞宝章は五百円 米子市 石 坂 + 新

御近所は俺の代からまるめる気 妻も子も旅俺だけがバラいじり 性理だけ生かし退院して戻り

お下げ髪この子に眼鏡いたいたし 正論をはく奴が居て座が白らけ

大阪市

西

111

晃

妻と子を抱いて羽摶くつばさ欲し 寝るだけが楽しみという妻になりし 神戸市

狩猟会長愛鳥会の季員兼ね 子だけでも四人もあるに犬を飼え 株下落マダムのサービス悪くなり

下関市 中村

九

呂

¥.

それ見よと買えなかったのがうそぶきぬ 平田市 久家代仕男

株下落

代読をするにコップへ水を注ぎ 選果場柿の中から声がする 立ち稲に芽が出たことを肴にし 大阪市 本 多

志

新しい大臣の名で許可が下り ポスの名がラストにあったイロ スプリングホテル応挙の軸もかけ クーポンの旅は西日の射す旅館 ハ順

出雲市 原 独 仙

柏鵬に賭けて職場は休憩中

西宮市 野 B 鵜 T

雪

情事まだ残る布団へ子を寝かせ 満足を背にありありと髪をとぐ 割り切って嫉妬する間のレース編み もういやと言わせぬ技巧なり情事

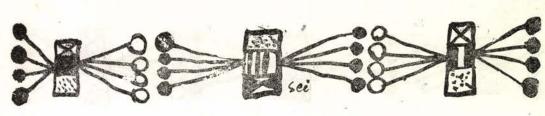
山脈の正直たがいに水を分け 西宮市 樋 · 口 舟 遊

佐渡市

高

野む

C ts



優等だったことまで不遇の身を責める 儲けだけ端株になって手に残り 下がれば下がったで株の本が売れ 請求にまだ候がある老舗

高砂市 吉 原 紅 月

すねて見て愛情をたしかめる 機関車にはダンプカー歯が立たず 素通りをされて落目を意識する

大阪市 魚 住 潮

続西成界わい(五句)

夫唱婦随夫婦が手錠かけられて 拾い屋の午前六時をもう歩き 国道に面しておむつ飜がえり 古稀近しまだ地下足袋をはいて出る 弱い者いじめ革のジャンパーの男来る

暴落をしたのに豚の食らうこと 子を負うて鋤いているのが男です 颱風の余波が嬉しい菜っ葉の値 恍

愛媛県 村

1

加

童

倉吉市

前

安静の気もそぞろなる空財布 たまさかの試歩に千円札が消え 稲を刈る妻かたくなに抵抗す かまきりのようにやせて、栄養士 鳥取市

同書きを押戴いている名刺 養子のくせにでっかい声を出

> 踊り子の夢は主役の金のくつ 白山の山脈白く明日は晴 下駄の音やっぱり親子あらそえず

大阪市

*

虫

乃

お悔みに行って委員にされちまい 捕かまって明鏡止水などとぼけ もう株はこりごりしたと主婦日記 大商社にぶんさんかけたが自慢なり 神戸市 傍 島 静 馬

不機嫌な風呂も落目の株のこと 出雲市 野

月

引込みはつかず労使の冬の陣 死の灰で主義なき野鳥死んだとさ

肥りすぎコンクールにもはねられる 大阪市 井 庸

估

布施市

森

爱

論

モスクワもどんどんふれふれ死の灰が カンバスになげつけた絵が入選し 問 一答ひやひやさせる参観日 大阪府 谷 沢 好 祐

比べれば次男敷かれたほうでなし 国立へ親誰よりも誰よりも そこのバス赤で渡れず乗り遅れ

終列車に間にあいそうな女を送る 会いに来てよかった貴女の片えくぼ 大阪府 津 徹

11

愛媛県

紫

光

步

字 社長の娘もらって酒をやめさされ アンテナを家賃を溜め屋根にたて 選挙以来町長さえも顔見せず

女給着任トランクが一つきり 青燕市 I. 藤

甲

ti

文化の日も文化に遠い手内職

ふところでとられる金があたたまり 年下が忘れられない相談欄 真面目一方が妾をもっていた 試作品みたいなものも女着る

職工の父を長男だけが知り 母の面影へマリヤ様の貌を重ねる 抑留以来丘の夕陽に感傷す

豊中市

林

夢

虹

バタ屋部落もクリスマスの灯がともり クリスマス幾人神を省りみし トランプでフルシチョフの死を占えり 西宮市

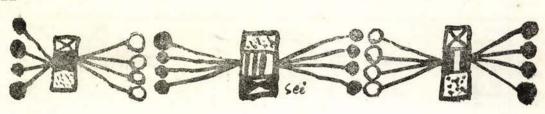
寝てる間が一番楽な小商人 職場中知られて気楽になった恋 なりゆきにまかそ心中しかねない 足洗うた日から仲間が恐いなり

祟りだと信ぜず釣で命捨て 筆の立つ割にずぼらな句読点 口だけの御気の毒さまカッと来る 里心消えぬ貰い子持て余し

大阪市 今

西

生.



品行の良かった旅の旅疲れ 京都市 室井

八

九

1.

花束より生一本をと言いたそう 一現でも襟のバッジがモノを言い 一人前なお喰べあます老夫婦 風

高知市 松

飲むと飲まない欠点をけなし合い 先代の頃はと腹の立つ事を云い

岡山県 Ш

声

冬物を出せば子供は伸びており 家柄より月給の額を先に聞き 金持ちの方が集金てこずらせ

小松市 F 太 郎

詫びに行く運ちゃん繃帯派手に巻き 資本家を敵にまわして脂ぎり 弔電は以下同文ですまされず 暴落で損することも妻が知り

十二月翼がほしいおもいする

石川県

高

變

十二月僕は君にも借があり 美國市 安平

次

弘

道

血圧を気にしながらもまだ怒り キャッシュなら利潤を無視する金詰り 秘書庶務の順に美人を配属し 無医村の軽患獣医ですまされる

目薬をさす顔課長の顔でなし 字部市 Ш 実持男

> 芸術のわかる農夫で貧乏し 景色より君も見とれていたガイド その家の生活を物干しさらけ出し 大阪府 尚

史

おむすびのうまさを山に教えられ 頭だけ濡れずにすんだ折たたみ

抽斗の整理でもせん社長ルス 納棺へ肌の白さをほめそやし 法華経の太鼓も年季のある響

同 舟 沂 詠

大阪市 橋 本 緑

熟柿一つ持った村の子写される しんみりと喫茶で話す悪だくみ 長野県 高 峰 柳

児

芝居気をまぜればもらい泣きされる 秋の陽をスカートの脛吸っている 不渡りの噂ゴルフへ顔見せず

宿題の子が留守番を渋く受け 放射能雨に義憤もまぜて濡れ 唇を噛んで理屈に押されてい ずるずると年増乗気の恋となり

おない年らしい姿の松並木 三日とは続かぬ月のそのまるさ

今治市

長

野

文

庫

その上の欲で人間ドック入り 黒帯の自慢がてらに持ち歩き 和歌山市 月

宏

方

敗戦はあ、玉音の文字も消え 白髪とはあ、人生の終止符か 貸ゆかた着ても貫禄ある社長 はい叩き殺生して来たなと思い 出前持これも食う道生きる道 罐詰に独身用とまで書かず 大洲市 米 沢 暁

御言葉へ感激古い訳でなし 下着から替え御会釈を賜る日

明

汽車弁の味も秋なり木曽路行く 産地とはぶどうの中に町があり

山を来た目を喜ばす諏訪の水 親しめる浅草荷風ならずとも

塩の量附録通りにしない母 シャッターへはいれと言わぬのが不服 ゴムバンドきちんと直すお人格

新居浜市

明

貰い風呂うっかりくしゃみして仕舞 長の字が附いた頃から弱くなり うどん屋のしょうぎで別れ話する 軍人墓地都計に邪魔になって来た 稲刈にすまぬと思う釣を垂れ どこでどう知ったか妻の名で株屋 伝言板しばし推理の足を止め



自向自釋

恒例の新春特集をここにおくる。(到着順)だった。と諸大家に自句自釈をお願いして、あの時に出来た句がこれだ。その時はこう

句 自 釈

山路開古

皆様。おめでとう。新春特集として自句 自釈の編集をするから、原稿を出せという 自釈の編集をするから、原稿を出せという ないものが、自句自釈もおこがましいが、 こういう原稿依頼があらわれたからには、 まれも機会として、今後は私も作家として とれを機会として、今後は私も作家として かられる。

家五百数十名を網羅する自選大句集の巻頭り送って置いた。それが意外にも、全国作ので、それではとて、抽い近作を十句ばかので、それではとて、抽い近作を十句ばかあった。序に句も出せということで、これるがあった。

事情をも生じて来た。なことであったが、それが為に多少厄介なを飾ることになった。私としては大変名誉

にある如く見えるのであった。 というのは、川柳久良伎門の私の下位が、私の次席に掲載されて、恰も私の下位が、私の次席に掲載されて、恰も私の下位というのは、川柳久良伎門の私の兄弟子というのは、川柳久良伎門の私の兄弟子

当良無比の鞍馬氏が、その日めずらしく 善良無比の鞍馬氏が、その日めずらしく 東は景気がいいのではなくて、 不 遜 な 後実は景気がいいのではなくて、 不 遜 な 後 まは景気がいいのではなくて、 不 遜 な 後 まして、私に突きつけ、

「これ見たか

叩いた。といって、句集の巻頭を開き、私の句のといって、句集の巻頭を開き、私の句の

「いや。まだ見ておりません」

らかのようであった。 といって、チラリと覗くと、その次席にといって、チラリと覗くと、その次席に

「今日のところは許すが、以後気をつけには弟子というものはないですから」には弟子というものはないですから」「おのお弟子がやったことだろう」

う思い入れで、話を打ち切った。などはいわなかったが、鞍馬氏はそうい

その後句集が届いて、一見すると、さすをの後句集が届いて、一見すると、されいみと私の句が載っているのだった。こわいみと私の句が載っているのだった。こわいみと私の句が載っているのだった。こわいみと私の句が載っているのだった。

じがする。

じがする。

ことにうそ寒い感じが、全国には納まらない作家も沢山いるのではないかと思うと、まことにうそ寒い感ではないかと思うと、まことにうそ寒い感じがする。

故の「自句自釈」であるから、この執筆は
関古一言なかるべからずとの、救援ボート
関古一言なかるべからずとの、救援ボート

私にとってはけっして無意味ではない。さればとて、「そんならあたくしの作った句見て頂くワ」という程の自信もないのであ

となたの選定か知らないけれども、私の作品を共同句集の差頭に立てて、第一人者をしての優遇の道を講じてくれたことは確かで、川柳界の総意による言わず語らず、常に孤立無援で、公平に川柳界を見てず、常に孤立無援で、公平に川柳界を見てず、常に孤立無援で、公平に川柳界を見て水た。人の揚げ足をとらず、無用の論を避け、いつも川柳の長所のみを取りあげて、け、いつも川柳の長所のみを取りあげて、け、いつも川柳の長所のみを取りあげて、はい句だが、「点」所載の問題の句の二担い句だが、「点」所載の問題の句の二三につき、作家としての所感を述べさせて頂く。

くろがねの蝦夷にサビタの花が咲

北海道を旅行して作った句である。サビ 北海道を旅行して作った句である。サビ タは六月頃が花期であるといわれるが、俳 の季麗にもある可憐な白い花で、その名 前が面白い。くろがねは北海道 全 体の 感じを示すもので、サビタを配合させると、じを示すもので、サビタを配合させると、 で
一般の鑑賞には上らないのではないかと思う。

誰が忘れトイレに「月と六ペンス」

は喜ばれ、いまだに揮毫を乞われる。 と六ペンス」はサマセット・モームの小説 と六ペンス」はサマセット・モームの小説 と六ペンス」はサマセット・モームの小説 と六ペンス」はサマセット・モームの小説 と六ペンス」はサマセット・モームの小説 と六ペンス」はサマセット・モームの小説 と六ペンス」はサマセット・モームの小説 と六ペンス」はサマセット・モームの小説

るが、このバランスはなかなかとれないも 長するのを楽しみにしている。そんな私の ので、職業を後生大事に守り、せがれが成 姿勢で歌えというのが、私の川柳標語であ いる訳でもない。高邁な思想を蔵して、低 今の生活を、私の言葉で述べたまでである。 世間が問題にする程のうまい句を作って 鈍根さわしらなるよにしかならず にこれという才気もなく、手腕もない 今後ともどうかよろしく。

掌のままで

台

相 元 紋 太

思わず懐しさのあまり短冊のことを忘れ 事や年代を思い起すに足る句に出会って、 集などひろげているうちに、その時の出来 ことにしている私であるが、それでも短冊 もあることはある。 を求められたりして書く句を探すため、句 て、そんな句ばかり読んでいるということ 自分の過去の作品に、あまり執着しない

吟したというのは殆んど無いと言ってよく 時日が経ってからその事と関連した句を作 の感懐がその句から湧き出るのである。 ってはその場で即吟したと言ってもよい程 っているというのが実際であるが、私にと 私の句は、際会した出来事のその場で即

脱衣箱自分のとしの戸へ入れる

ある。銭湯の着物を入れる箱 番号が大きく書いてある。その2の意字へ さにどめたと思ったことで覚えているので その中で、この句は即吟で、その時嬉し (棚)の扉に

> 決まって入れていた時代だから無論大正六 の句を思い出す。 数字が無い齢になったが、それでもまだこ 七年頃だったと思う。今では、私の入れる

靴をかえられて忽ち世が暗し

の大会が済んだ玄関での出来事、かえられ らい出来事だった。 葵徳三君。まだ物の不自由な時で何とも辛 に気の毒でその場では口によう出さなかっ たのは新靴、残ってるのはボロ、その人は た。昭和二十何年かと思う。天王寺本坊で この句も即吟であるが、かえられた当人

出帆へ振るものがなく兩手振る

消えない。 さんですよ。外にも見送りがあっか無かっ か振って見送ってくれる。不思議に思った い好男子、それに寄り添って女夫雛のよう たか今でもこの二人だけが目の底に残って 私、あれは誰だろうというと、清幸君の奥 に一人の美人がこれも盛んにハンカチか何 が、現番傘編集長の斉藤清幸君、気持のい っ鼻に立っていつまでも歓送してくれたの 大会が済んで船で帰る私達を、埠頭のちょ この句も同じ時代だったと思う。別府の

いて置かなかったかと悔やまれる。 はなかった。この間のこと、何故日記に書 西宮から通うた。川柳。食料。勿論遊びで げ笠川柳社山田祥園君宅へ月詣りのように 戦後五、六年の間毎月一度、犬山市のす 泊れ々々をほんとに泊れかと思い

い声を立てたのが祥園君の奥さんだった。 だったと思う。この句を読んで朗らかな笑 が出来た。大分食料事情もましになった頃 え過ぎるほどだった。そのうちにこんな句 祥園夫妻の真心からのもてなしに私は甘

待合室時間を惜しむ人がいず

り物は往復共大変だった。この句は国鉄の 構内ばかり広くて、真っ暗な小さい町を見 だけで、何処でもよい句ではあるが、あの を思い出す。作った私が米原駅を思い出す 時間も、三時間もぼやっと待っていたこと ながら、句帖へ書きつけていたことを思う 米原駅の待合室夜中の光景。大勢の客と二 今になれば夢のようだが、犬山通いの乗

ぜんざいの好きも話のたねになり

ある。 らかに笑い合えるとは――快よい思い出で 福岡からの戻りに寄った時、外の話よりぜ た。何んとぜんざいを話題に、大の男が削 んざい中心でしばらく賑やかな一座だっ いうほどのほんとのぜんざい好き。いつか は飯よりぜんざいさえあればそれでよいと 八幡市のくろがね吟社主宰上野十七八氏

合掌の癖のまんまで目がさめる

をつける。いつ頃か忘れたが戦後の句であ ある。そんな何もあってよいのでないかと 思う。人のために作るのでないからと理屈 も面白くなくても作った私には嬉しい句で そのままを詠んだ句で、人に解らなくて

休ませて貰ったぐらいの気持で、出来た句 ないが、まあ言えば健康で、無事に一夜を る。有難い感謝、これも文字ほどの強さで ても大体それに似た形で寝入る。朝、目が 両手を胸にのせる。文字通りの合掌でなく 覚めると昨夜のままで両手が胸の上にあ 私は仰回けでないと眠られない。そして

よっと違う。朝半時間程片腕を敷いて片足 この句で健康なそのころを思う。今はち

起こしたら腰かけられる夜の駅

すると目ガンではないかと思えるフシもあ る ない。自己診断では軽うて胃下垂、若しか うも身体に変調を来たした気がして仕方が がついた。ソ聯が30とか50の核実験以来ど を曲げて脱伏せに寝て、それから起きる癖

鳴して貰えればそれに越したことはない があることが有難い。人に分って貰って共 ある。長生きをしてまだまだ作句したいと ぬ句も相当あるのである。たとえば、 が、分らぬと言われても自分では捨てられ 言い出しては二人だけで充分楽しめる句も 一人だけが分ってくれていて、時々それを とにかく、日記を書かない私に何より句 、或る

私 0 旬

紫

郎

く横浜へ行って、医院の主任となり、多忙 るのであった。街はずれの小さなチョロチ 溢血で倒れたので、ソレを手伝ってやる可 這入って居るのを見て、 ョロ川の水が、何んの苦もなく流れて海へ にも各方面への往診の中でも句材が目に入 明治四十三年に、横浜の友人の医者が脳

て所定の場所へ運びこんで居るのを見て、 らやんで、次に起る私の心は様々であっ な荷物を何ンの苦もなく、次々と持ちあげ た。又或時は、港へ行って見ると、出船が 積荷をして居るのを見ると、起重機が巨大 海と云う大理想境へ行くのだなあと、う こんな川の水でも海へ行くのだぜ

文句も云うだろうが、何も言わずに、言い るのを見入って居たのであった。 付けられた通りに、だまって仕事をして居 と作句した。是が人間なら、いろいろと 起重後はだまって仕事して居るよ

付いて、喜び笑う声に私も嬉しくなって笑 は、そんなあぶなかしい足つきでは渡って ったが、それと同時に此せち辛い世の中 ソレでも遂いに差出した手へやっとたどり 又起きあがっては二々足三足しで倒れる、 を見ると、思わず両手を出して、おいでお いでと招くと一生懸命に、こちんこちんと 目に、やっと立ちあがり得て、喜び笑う領 、今年三十七才になる三男が生れて一年 それが信州の湯田中温泉へ医 院 を 開業 ト足、二き足あぶなげに運んでは倒れ、

あんよあんよ我子よ立てよ强く立

親も気あいをかけて居るのであった。 さあしっかり立って、うんと踏んばってと って居るのを眺めて 一ッ方には長男や次男坊が騒ぎ疲れて眠

何んになる何にしようと子等を見

つくづく考えさせられるのであった。

几 つの旬か

堀 口 魂

人

なつかしげに盗癖ある男

い東京弁にもかかわらず、女のようにやさしい瞳をもっていた。言葉は、はぎれのよ 四十をすぎているのに、少年のような涼

> であった。 った。友人としても、気持のよい心の持主 く、女性から好感をもたれるスタイルであ しかった。中肉中育、身だしなみもよろし

がめてやれない私であった。彼から、盗癖 が好きであった。昨夜あの料亭であれをや は、去年の秋に亡くなった。 さえなくすれば、純情の持主であった。彼 ったな、と気がついていながら、それをと いている私である。しかし、私はこの友達 附しなければ、気がとがめる弱い性情を抱 そうでなければ必ず、何かの社会事業に寄 こか、はやらぬお寺や神社へ喜捨するか、 交番へとどけることはしないけれども、 ど であった。今でも拾った拾円玉をわざわざ だりごまかしたりすることが極端にきらい うに、長いまつ毛をしていた。私は、盗ん 悲しそうであった。竹久夢二描く少年のよ ことをしたあくる日の彼の眼はことさらに ちょっと、手を伸ばす癖があった。そんな た。酒席から猪口を持帰る程度より、もう それにもかかわらず彼には盗癖があっ

ゴッホが咲いたやうな向日葵

した姿を、ビルの谷間にさらしていた。 希望されていたが、九十余年の星霜に老朽 は、何とかしてこのまま保存してほしいと 人館の面影をのこしていたので市当局から った。しかも、その建物は、明治初年の異 式会社神戸支店は、旧居留地のまん中にあ 空地があった。アカシャや公孫樹などの 私が、かつて支店長をしていた、江商株

ゾチックなムードを漂よわせていた。私は りは、アメリカをはじめ二三の領事館の旗 や、オリエンタルホテルの旗などが、エキ と、赫の芯部とを、ひろげて咲いた。ぐる り、が大きくなり、烈日の下に、黄の花弁 庭木の間に、誰かがまいてくれた、日まわ

私には描けなかった。辛うじて一句を詠 ゴッホ、なら描くだろう、と思った。否、 ゴッホ、なら当然描くべきだ、と思った。

そのあとでとうとう団地化された。 った。戦後はアメリカ博覧会場になった。 なった。戦争前から、航空機の陳列場にな はじめは田圃であった。それが遊園地に

事になってしまった。 出られないので、ちっぽけなくせに、大工 阪神線と四つの路線をくぐらなければ海へ となってみると、阪急線、国鉄線、国道線 この流れを改修することになったが、さて 涸れるようなことはなかった。それどころ を集めてくる小川にすぎなかったが、水の め人をおびやかした。団地化するについて か、時々汎酷して、上手の、住宅地のつと 麓上野ヶ原の台地に発して、住宅地の下水 まん中に一本野川が流れていた。六甲の

り下がったが、再び小川の姿を取戻してき たのである。 ようになってきた。いっぺんは割下水にな れのみか水藻の中に小鮒の姿まで見られる と、石垣の間からも雑草が生えてきた。そ りで風情がなかった。市役所が気をきかし くなったが、御影石の石垣は白っぽいばか ん大きくなって、風にそよぐようになる て、柳の並木を植えてくれた。柳がだんだ 川は直線になった。おかげで水はけはよ

わったなあ、と思った。 団地に住んで十年を過ぎた。このへんもか に立って流れる水を見ていた。かりそめの ある年の師走の夕、私はこの川の橋の上

除夜の鐘五本の指をたしかめる

稿をわざわざ質いに来るような酔狂者もい 私は売文業者ではない。又、私の素人原

えないし、日頃、雑誌をいただいているお って困っている。たのまれたらいやとは言 礼の意味もあるし、それに、無料だから書 ない。それにもかかわらず、常に文債をも

かないのだろうと、邪推されるのが、何よ

来年へ流れる水を見ていたり

西宮、海清寺の除夜の鐘が鳴っている。 よろしくたのむよ、一本二本三本四本五本 手の連中は、主人公の物好きから酷使され らいてくれたな、と思う。とりわけの右の 奴とがある。この一年、お前たちもよく働 ずつ折ってみる。音をたてる奴とたてない どであろうか。十二月になると、枚数が多 て、さぞくたびれたことであろう。来年も 行き戻ってくると、つくづく自分の身体を くなるのも、毎年の例である。 りも不愉快でもあるからである。川柳誌や いたわってやる気になる。手足の指を一本 業界紙や県人会誌など、月平均して百枚ほ

大晦日の夜、箸紙も書いてから、銭湯へ

思 い 出 0

句

東 大 八

てばかりいた。 まで困りいつも二人で情なくも腹を空かし 文の収入もあるわけもないので、風呂銭に さるお寺の寒い位碑堂に生活をもった。一 てきて、ぼくは八ヵ月ルンベンをした。 おなかの大きくなった女房をかかえて、 昭和二十二年春、妻と大陸から引き揚げ

難くおし頂きながら、何気なく包み紙にし 固めたものを二枚恵んでくれた。それを有 た古新聞をみると、 そんなある日、寺の住職がメリケン粉の 「海外引揚者援護脚本

募集」というのが眼についた。締め切りま

「よし、書いてみよう」

半紙ですぐインキがにじむのだった。 子の綴方用のものをもらった。黄色いワラ 方から彼女が清書した。原稿紙はお寺の息 女房の方が字がうまいので、ほくの書く一 と即座に決心して鉛筆をとった。ぼくより 一夜づけのそれを大急ぎで出したら女房

がわたしたちの分だわね」 「一等五百円は当選者なしで、二等三百円

ントにうれしくて、ぼくは本堂の御本尊に 女房の名にしたのも効果があったようであ 人はこどものように抱き合って喜んだ。ホ 久しぶりの大枚の金三百円をにぎって二 事実はその通りの発表になった。名前は

木魚をたたいてお礼を言った。 かくて出来上ったのがつぎの句である。 お酒でもあればと妻もうれしい日

住:

衣

布

部

男

から想い返すとそれは無駄な努力であった ようであり、またそうでもなく、やはり私 分の句」を主張してきたようである。今 川柳に対する信念のおもむくままに「自 くたびれたりしたのであろう。その時々の がいつの間にか曲り道に出てしまったり、 を突き破る努力はしていたようだが、それ んべんか壁に突き当った。そのたびにそれ 四十年にもおよぶ川柳作句の過去で、な

> ある。 の方の研究もいささか励んでいたつもりで を読んでいた。亡父の遺業である「冠句」 の骨となり肉となっているようでもある。 の世界にもつながりをもっているので、そ の俳誌を見ていたし、そして誰かの俳句論 昭和三十六年という年は一年中、どこか

焦点としておきたい。 経過もあるわけだが、ここではそれを省い る。私の言い分にはいろいろ理由もあり、 でもいっている「今日只今の句」という境 答案として出そうと思った。いやそんなむ 地を、この機会に示そうと考えたのであ て、その「今日只今」の観点を自句自釈の つかしい理屈でなしに、私が近ごろ誰れに そしてその結果を、この「自句自釈」に

の句を探してみる。これは即輿の句。 まず、衣・食・住という三つのポイント

いう俳諧性の信奉者なのである。 柳の所産である。私はあくまで十七文字と 言い足りないようだが、私の眼で見た川 カタカナは服ひらかなの重い帯

流」ともいい「遊び」ともいわれるらしい る。現実と句の空間にある「間隙」を「風 国女性群への一矢と気負うているのであ が、私はそれを「川柳」だと解している。 抗を交ぜたつもりである。今日只今のわが な鑑賞として、そこにすこしく私なりの抵 にかく近ごろの日本人の「衣服」の考現的 ーマ字やエスペラントまでは遠いので、と 感じで気がひけるのであるが、まだまだロ つぎは「食」についての句。 ひらかなの重い帯とはなんとしても旧い

食うて寢て働く平凡にはなれず

してはまとめて迂余曲折の末に、このよう がないのだが、いろいろと作って消し、崩 いささか気のひけるほどこの句には技巧

いじゃないか、といいたいところであ った。平凡にはなれず――それに間違いな 截明瞭に、こう言い切ることに決めてしま つの鍵があるように思うけれど、私は簡 っては句の余情もないのだし、第一その平 はなかろうか。そんな風にも考えてみる。 するなら、この句はそれに当てはまるので えるということが、川柳の一つの魅力だと になってしまった。誰にでも理解してもら 凡にはなれぬという、そこに何か肝甚な一 平凡にはなれず――とこう説明してしま

次は「住」についての句である。 家建てて車を持っただけで死に

える世の中である。 といっても近ごろは十分の一で買うたと言 する方が現実感も出るし、第一車を買った 車を買うたというよりも「車を持った」と けで死に」となっていたと覚えているが、 である。その時は「家建てて車を買うただ この一句は「平安」十月号に戦せたもの

が、いずれを見ても、争えぬことは句をつ 三つの「今日只今」を識したつもりだった の死への道程をいったものである。 知れた交通事故やそのほかの不自然な人間 定命のことばかりでは事すまぬ。言わずと という時に死ぬということは、天地自然の ながらもカーを手に入れて、さてこれから なんとかいって以上の通り衣・食・住 せっかく小さいながらも家を建て、小型

ていると思われているようであるが、私自 れ、また実際にそんな風な抵抗の場に生き 方に気がつくのである。 層部に対しているという、その句境の在り 川柳という文芸がいつもそんな風に見ら

> こにこそ真実に「今日只今」の一川柳作家 うであろうか。 らすれば、それは極めて自然であって、そ の意志と文学が生きていると思うのだがど 身も近ごろそれを意識するようになった。 しかし虚偽の句は作らぬという私の信条か

不具者と係

高 須 味

句を選んだ。 はないが、自句自釈をするとすれば、一番 目分の身辺に近いものが選びたくて、この 一句である。別に自慢するほどの自信句で これは、ボクの昨年中の「不具川柳」の 散步道 孫に両手を欲しがられ

だ」と言う批許も聞いたが、ボクは敢然と づけるつもりでいる。 ポクは、本年もまだまだ不具川柳を詠みつ は、不具者が詠う」のが真実だ、と信する して不具川柳を作り続けた。「不具の悩み な」と言う非難も聞いたし、「暗くて不快 具川柳の製作に全心を打ち込んで来た。 に左手を失って以来、則する所あって、不 「不具を売物にするのは、どうかと思う ボクは三十四年二月に、交通事故のため

たような感じで、ボクは孫に没頭した。 思議なもので、生きて動く玩具を与えられ に、孫を得た。孫の可愛さというものは不 それと同時に、ボクは不具になる少し前

くる自分自身の位置の暗さである。私の持

っている「川柳の眼」がいつも低辺から上

孫を得て子の恩をまた一つ知り

どである。事故現場に駆けつけた急救車に ボクは自分で乗り込んだくらい意識はしっ その年の年質状に、ボクはこう詠ったは

られて、左手を根元から切断されるなどと ことを、思い続けていた。 かりしていたので、窓時間後、麻酔をかけ は夢にも思わず、つい先刻別れて来た孫の

孫を抱く手を切りに行く急救車

るの」と、孫はボクの隻手が気に入らな よく孫と散歩するが、孫が勝手に飛び歩く 出来ない。「おじいちゃん、いつ両手にな 勢になる。そこで、たまには左側にまわっ はいつでも左手を高く引っ張られて歩く姿 のが危険なので、いつも手をとって歩いて けて作っている。その孫と不具が一句の中 て、右手で引かれたがる。しかし、それは いる。だが、此方は右手しかないので、孫 にまとまったのが前掲の句である。ボクは だから、ボクは「孫の句」も、ずっと続

左袖此方も出せと孫の無理 孫育ち祖父の眞手を不便がり

あるまいか。 ていない祖父を持った孫も、また不憐では できない祖父は哀れであるが、両手そろっ ある。両手で、可愛い祭を思う存分に愛撫 等々、みな一連の「不具者と孫」の句で

結婚前後の句

北 JII

徳が衰えますと、ひどい時には今朝の朝飯 か、分らぬこともあります。年を取って記 されると、どちらが先きにできた句である す。自分の句を見ましても、古い二句を出 記憶というものはハッキリしているよう 案外間違っていることが多いもので

その句のできたヒントなどは、ほとんど思 だそれほど記憶は衰えていませんが、それ 思い出せなくなるそうであります。私はま い出せない句が多いようでした。 何月号に載っているか、で分るのですが、 すが、それがいつできたかは、雑誌の何年 出して、自分の句を色々と探してみたので した。それで古い「川柳雑誌」を引っ張り でも今度のアンケートには困ってしまいま のおかずが何であったかも、その日の晩に

ケーブルの一番前に立つ若さ

す。六甲へもよく上ったものでしたから。 ずお詣りしていた男山のケーブルですし、 ば三月号あたりに載っている筈で、当時必 であったか、思い出せません。初詣でなら の際であったか、あるいはハイキングの際 が見当りませんでしたので、これが初詣で の句にしましても、この句の載っている号 て、六甲山のケーブルということになりま ハイキングならば、その他の号に載ってい

十五年四月でしたから、もう二十年以上も 頃の句がかなり出て来ました。結婚は昭和 覚えているものだ、と教えていますが、古 い出せて来ました。 ので、句を見ますと逆にその頃のことが思 前になりますが、強く印象されたことです い「川雑」を出して見ますと、私の結婚の 心理学は、強く印象されたことほどよく

くなって、学位勉強どころでもなくなりま 年に日支事変が起こり、病院も次第に忙し したので、結婚に踏み切ったわけです。 ではなくて、平凡な見合結婚でした。学位 しようかと迷っていましたが、大学を出た を獲る方を先きにしようか、結婚を先きに 私達の結婚は、この頃はやりの恋愛結婚

> 柳会に「奈良」という題が出て ません。それでも昭和十四年十月の阪大川 できたのは何月頃であったか記憶にあり た。話は前の年からありましたが、婚約が

頭の中に結婚という考えがあったものと思 いる記録が残っていますから、その頃には という句を、路郎先生に抜いてもらって 妻の手がフッと冷たい秋の奈良 思い出の奈良で新婚雨になり

われ、婚約もできていたものと考えられま

えています。そして は、またわざわざ奈良まで行ったことも覚 たものでしたが、この「奈良」の題の時に 私は奈良が好きで、休みにはよく出かけ

クーポンの奈良は昼めしだけにす 子の弁当若草山が待ち切れず 奈良に来て父の無趣味が嫌われる

できません。 も抜いて貰った感激も、今に忘れることが と、五句提出して、前の二句と共に五句と

昭和十五年の四月号には 婚約の一日三十時にも思え

こともありました。京都には彼女の兄が住 という句が載っています。式の日が近づく す。京都駅のホームで待ち合わせました。 んでいましたので一しょに訪問したので 都まで来て貰って、今で云うデートをした たのです。その頃のある日曜日、彼女に京 と、一日一日と日が経つのが待ち遠しかっ

愛人をコートの色ですぐ見付け

という句が残っています。「愛人」という 言葉が気になったのですが……。 結婚の時の句が 今日からの挨拶私達と云う

と大学が同期で滋賀県で開業されていまし

仲人は病院長のW博士で、岳父はW博士

日旅行に出発しました。旅行は台湾航路の を廻って帰りは汽車の寝台という豪華版で ら三角港を経て熊本に出、更に阿蘇、別府 でした。甲子園ホテルで一夜を明かし、翌 一等で門司まで行き、長崎、雲仙、島原か

こが見送ってくれました。 靖川丸だったかの船長をしていた私のいと 入和丸神戸出帆の際には、当時川崎汽船の 新婚旅行乘せてる銅鑼のきよう 国宝の前で女房の顔を撮り

りますが、古川柳の影響かも知れません。 ます。「女房」という言葉が今では気にな な気もします。 これは熊本城で彼女を写した時の句であり また大人ぶりたい気持も多分にあったよう

供がなく学生をみなわが子のように可愛が 世話にばかりなっていました。先生には子 たのでした。 顧いして、松原住宅の先生のご近所へ探し っておられたので、親のない私もつい甘え て貰いました。廿先生には高校時代からお 新居は、私の高校時代の旧師り先生にお

世話好きの定評のある世話になり

そのU先生も、仲人のW博士ももう故人に なられました。

飲んで欲し

麻 生 葭 乃

飲んで欲しやめても欲しい酒をつ

この句は亡き漫画家吉岡鳥平氏の漫画にな 「川柳雑誌」の表紙になったので、

である。路郎と差しで飲んだら、路郎が一 おそらく戦争当時の句でないことは明らか と、したたかのど仏をならしたのだから、 の背に、銘酒の広告のあるのを見ただけで **饉にならなかった戦争以前の句であると思** 花のしめりに及ぶべき」などにあるのだ ーモーションであるが、飲みっぷりはスピ 杯飲む間に私は三杯、仕事にかけてはスロ を選んだのである。此句は日本がまだ酒饑 を明らかにした方がよいと思ったので此句 が、一寸でも知って貰ってる句のオリジン の音もそうひびく」「ルビー ードアップである。 んなに知られて居る句である。 私の性格表現の句としては 酒が不自由になった時は公園のベンチ 「なつかしの酒よベンチへ名を残し」 虚嚴嚴本魚 サファイア

なア」と云った。私がはめて貰うのはこん が「御主人より奥さんの方が大分いけます へ飲みに行った時も、居合わせた客の一人 いつだったか、堺の「猩々」と云う腰掛

びである。魂のあえぎである。 路郎は毎日シュンとして暮すのにきまって もし路郎が発心して、 柄で、飲むは飲むは、ふかの様に飲んだ。 水屋から姿を消して終う。そして機嫌酒の たらどうなるだろう。銚子も猪口も忽ち 飲んで欲し」と云う上五字は私の心の叫 キング喫茶店のマダムであった時は商売 何と淋しい事ではないか。だから 一滴も飲まなくなっ

思うためである。夫の酒代主臍繰ったとて 考えるため、然し私の場合は路郎の健康を 就いては二様に解釈されると思う。一つは 夫の健康を思うため、一つは一家の経済を 口構えの家も建ちそうでないからである。 さて「やめても欲しい」と云う中七字に

> も私も酒好きであると云う事だけである。 判らない。唯ハッキリしている事は、路郎 見た。その比重はどうだろうかと、「マア どっちが六分で、どっちが四分か矢ッ張り 四分六かなア」と首をかしげて見た。然し ィレンマに立った私の気分を静かに考えて として残って居る。私は東魚氏の一言で、 吻は今も私の心の奥底に、永劫消えぬ形見 氏は「飲んで欲し」の句に就いて、 しいと」いう気持、この二つの気持のデ にとろけた顔の艶、毒気のない東魚氏の口 ないよ」と云って陶然と猪口を置いた。酒 なぎを御馳走になった事がある。其時東魚 な、中途半端な、どっちつかずの句はいけ 飲んで欲しい」という気持、 久良伎門の森東魚氏存命の頃、竹葉のう やめて欲 「あん

この時の 句境 生 Z

庵

り、そのものすごさ形容に辞なし、約十五 雷雨となる。大仏様は秦然としておわせど 分にして雷雨去り、静かにと云うよりも寂 中、一天にわかにかき曇り、瞬時にして大 奈良に遊び、たまたま東大寺に大仏を拝観 しく三笠山のかなたに天のかけ橋一本が、 昭和十四年夏の作。遠来の旧友を誘うて 大雷雨 その雷鳴は広い堂内にするどく響き亘 虹一本をおいて去に

あって愛人のまま老けてゆき

火訓練にかり出されたモンベ姿の老妓が、 しみじみ打ち明けた身の上話。あれこれと の中が少し騒然となりかけた戦前。 防

> ころを見抜いての彼の女の物語である。 氏の消息は不明のままである。 彼の女は先月この世を去った。その後の彼 思いなしか煙草の煙も寂しくゆれていた。 もある。相手の男を私がよく知って居ると 思い当るところもあり、話の筋でとけた謎

胸毛が自慢 飲めば裸になりたが

三四の美妓に少し遅れて加わった一人の舞 立にさしもの広い庭に面した広間も蒸しあ に誘われて馳走にあずかった。折からの夕 つである。 に」。即興の句であるが忘れ得ない句の一 又その言やよし。 「だんさん、 へえおおき 思議な顔で、恐る恐る胸毛をさわり、而も とさわって見なと云えばニコリともせぬ不 てやったら、一座の連中笑いこける。そっ れる。外に芸のない私は自慢の胸毛を見せ 姿である。隣りに座ってビールを酌いでく 妓のだらりの帯。絵で見る清楚そのものの つく、一風呂あびた浴衣がけの冷ピール。 夜である。京都のとある料亭にさる友人 これは私の自画像である。五六年前の夏

母と往く心齊橋の片日照り

い事を知りぬいて居る母は、 場の烈しさが自由に凉しい時間を選び得な 日傘もさせぬ母と二人連れの歩巾は、暑 面からぶっつかりそうになる。手をひいて は南行も北行も皆、西側を歩きたがり、 りは相当にきついものであった。通る人達 日のような日覆もなく、維鉛の中の片日照 俤の一コマである。当時の心斎橋筋には今 の瞼にはっきりと灼きつけられて居る母の ある。もう十年近くも過ぎた今日でも、私 忘れられない愉しい思い出である。私の職 には暑かったが、私にとっては何としても 七十九才で亡くなる二年程前の夏の句で 心からほのほ

> 理屈を超越した二つの魂の姿である。 はない。人間世界の幸福とか、生き方とか 幸わせに満ちた二人の母子等には勿論関心 で居る様子である。往き交う窓百の人達は のと私と、この僅かばかりの時間を楽しん

打ち水をして待つ客の遅いこと

を、せめてもの句に托して見たかったので よっこり門から入って来られるような気が それが実現する事になって私は一足お先き してならぬ。落ちつかぬ、寂しいいらだち 返えしのつかぬ気持ちで一杯、今日でもひ 後に御他界なされて終ったのである。とり の機会が永久に回り来ることなく、数カ月 った。ところが、いくらでもあると思ったそ も機会はあること、軽い気持ちで電話を切 ては勿論失望はしたが、これからいくらで て残念だが又の機会にするとの事、私とし 都のお宅から電話があり、急な要件が出来 めて先生の御来駕を待った。そこへ突然京 に帰宅、門から玄関まで特に入念に掃き浄 ように云って居られた。或る日、とうとう **年ら泊りがけで楽しみにして居ると口癖の** 寺の宅の庭を是非一度見たい、一盏を傾け 六七年も仕えた日本画の師匠は、私の浜

鱸 賀 新 春 万 橋上ル電⑥三四九京都市東山区発手 伊 野殿 倉 (本名 四参弐地 藤 脓

四通新

仙

京都市二条高 条高倉西

司

のぼくもトラ。 が、ぼくはそのトラ歳の生れだ。 「こう三トラそろったのでは、あ 父も母もトラで、できたその子 ことしのエトはトラだそうだ

というわけでぼくは早いとこ家を 出たものだ。 の下にはマズイネー

供たちには有難い。 両方とも酒癖はいい方なので、子 で、よくさしむかいで飲みあった。 両親ともトラだけに酒が好き

と、ひきもできないくせにメスト 国 や 常さび をうなり出す どものぼくは大いに感心してみく ラの方が口三味線の相の手を打 らべていたものだ。 たらしてこのふたりの問から、こ オストラの方が得意の "紀伊の 酒とはいいもんだナ、とはなを

ぼくの酒好きは、こういう両親

と親父が正気づいてからニガ笑い

とても面白かったが。ある日、上 直接的な原因は、別にある。 ち込んでしまった。 このタルの上や間をとび回るのが てある。腕白坊主のぼくたちは、 みダルが二十も三十も広庭に干し になると、途方もない大きな仕込 向きのタルの底へ足すべらせて落 から発酵してきたものらしいが、 大きな作り酒屋があった。

寒明け 幼時ほくの育った家の近所に、

「二日酔いの具合はどうです」

んまり景気がよすぎてかえって悪

。 一びき出なくちゃあ一つ屋根

辺まで泡がういて黄色くなった雨 よ、これゃ酒だ」 グーとそいつをのんでしまった。 水がたまっていた。落ちた瞬間、 「このぼうず、トラになるはずだ この上むきのタルには、ひざの

一こどものくせに酔っぱらやがっ カスんで腰が立たない。 ガはぜんぜんしなかったが、頭が 大人の声をぼくは覚えている。ケ いまも耳近くでそういって笑う 「ヒッジ女にトラ男、門にも立つ

にきて、おふくろにいったことが のあくる日休んだら先生が見舞い 行くにもまともじゃないので、そ してぼくの頭をこづいた。学校へ

きも、彼女はヒツジでぼくがトラ ったのがこのエトのことだった。 で、みまかったとき一等さきにい ウマで、本人より母が苦にやん ものが大キライである。 だそうだが、元来ぼくはエトなる とも知らず、近所の人が た。ウマ歳だが、世にいうヒノエ ぼくの幼時に大阪で姉が死ん いまのカッちゃんと結婚したと トラ歳はエトのなかでもいい方

調子よくことが運んでいるのだか まのところよくウマも合い、万事 ラい。しかし底ぬけ貧乏以外、 とよく人前で言われたものだ。黙 っているぼくもつらいが女房もツ

> とき、土星六白かのえとら、かひ ずみ小僧が、刑場のツュと消える と指を折るねずみ小僧のかせぎど 正念場になる。かくて揃わったね 屋根のムネも三寸下り、怪談でも におよそ逆行している。 「いまなるカネは暮六つ」 元来、エトというものは、チョ

み大安吉日が式典である。 科学者の大学教授まで、こどもの 世の罪状にこれがならぶ。 結婚の相手はエトと相性を気に病 なんだが、原子力委員長みたいな こんなことは歌舞伎だけで結構

からではないが、エトの存在のた つづけてきたことか。 カヨワキ女性たちが、いかにその めにいかに数多くの男女、ことに 人権を無視され、じゅうりんされ ヒノエウマやぼくたち夫婦の例

もって心外のいたりというべきで 合いに出して論じるとはハナハダ 種といろいろの学名をもつはどの と、脊椎動物門、ほ乳綱、霊長 かわらずサルあたりはまだしも、 動物界の最高権威だ。それにもか 目、ヒト科、ホモ属、サビエンス ヘビやニワトリを一ダースも引き 人間は動物分類学上からする

り、トラの苦言以上の通り。 トラのエトめでたき新年に当

つじか知らないが七面倒くさい前 ンマゲ時代の産物で、核兵器時代

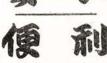
野

大

東











二重稿わたる心も改まり

り感銘は深かった。 文部大臣の挨拶も時事通信社長長 である。お茶の水女子大に於ける ない。生まれて初めての事だから の大きな魅力となった事は間違い いう日程であることが今度の上京 の最終日十一月二日は皇居見学と 究協議会もさる事ながら、三日目 谷川先生の 講演も実に有意義であ 今秋の文部省主催全国学校長研

待つ心の切々たるものがあった事 も確かである。 う光栄感が交錯して、時の到るを でもが勝手に許されない場所とい でも探る様な気持と一しょに、誰 の感覚からばかりでなく、私如き と思う。未だ見ぬ神秘の世界? 普通の日本人としては当然だった はあるまい。あながち明治生まれ 張した様に思う。これは私一人で 整列して時を待つ時から矢張り緊 下門に一千人の校長が五列経隊に 京の魅力は倍加の思いがした。坂 会釈を賜る予定ときいて、更に上 し、会の第一日に両陸下の御

米 沢 暁 阴

えない。否御質素そのままといっ 堅牢ではあるが派手さは微塵も見 た方がよかろう。 よう。ボツボツ見えて来る建物も 構えておらないという事にも通じ いう事であり、一口に言えば特別 然が自然のままに置かれていると 持がしたりした。それは極めて自 皇居内だったという我にかえる心 る様な錯覚にもおち入り……ああ そして又何処かの公園を歩いてい 大名が供を連れて出て来そうな、 堀を眺める頃はふと其所いらから 林あり、石垣あり、暖かい陽ざし で皇居の解説を受けた後二重橋を ばニュース価値も十分であり、映 それ絆袴をつけ髷でも戴いていれ に美しい秋色を鑑賞しながら道湖 な大きな道路の左右には森あり、 わたる。広場から広場をつなぐ様 画会社から撮影に来たかも判るま い。一千の晴姿は広い芝生を囲ん も揃っての登城(昔なら)。若 全国各地の土を踏みならして集っ た校長の靴、黒茶とりどりの足並 宮内庁を右に見て軍靴ならぬ

宮中三殿を拝し、生物科学研究

見え、畑にはいろんな作物が植え 処でなさるのであろう。 てある。陛下の御研究も恐らく此 所にさしかかると柵の中に温室が

けた。 いよいよ時来るの感を胸に烙きつ たに続いて、刻々に流れる報告は えて、静かにお出ましを待つ幾 分……。唯今御出かけになりまし た。係りの人の注意や指図を受け 両陛下 御出 ましの 場所とわかっ であろう。先頭が止まりいよいよ 実に美しい。ここらが皇居の中心 午後の陽ざしを受けたその陰影が を張り、秋の粧いをこらしていて 広い庭に出る。巨木が空高く枝 隊形を整え、ささやきも絶

となって大内山にこだました事で を祈る一致した力強い声…声…声 三唱となって、両陛下の と有難さ……この時の心境は万才 るが、はっきりとききとれた感激 励これ努めるようにとのことであ 次いで皇后陛下の御言葉をいただ ある。五分間位であったろうか。 に対して御言葉を発せられたので いた訳である。要は教育のため勉 を受けられた天皇陛下には、我々 ではあったが、はっきりと拝む事 私は、前の校長の頭と頭の間から が出来た。内藤初中局長の御挨拶 に立たれた。残念ながら背の低い に集まる中にそれぞれ二つの高台 迎えする二千の瞳が一斉に両陛下 れしずしずとお出ましになる。お やがて建物を曲り案内を従えら いやさか

> た うど前を通られ、いよいよ間近で 隊形を替えたので、私どものちょ も十分わかる。特に御退出の時は 会釈を賜りつつ御退出になられ

> > 南区医師会文化部 杏林

JII

柳

いだった事もあるというのに、こ 厄に遭って、天皇には仮御所お住 きの解説によれば皇居も度々の災 城から遷したものだそうだ。さっ 下りる。馬場であろうかと思われ 櫓が見える。徳川氏が京都の伏見 る箇所をすぎると右石垣高く伏見 呉竹寮をすぎ皇居を一巡して仮を で見送った一行は更に御苑を見学 しながら、木立を縫い、堀を渡っ て閑静そのものの御苑にはいる。 生物学研究所へ姿を消される主

で、切符を 定だったの 途につく予 線で帰郷の 明日は中央 座へ出た。 ながら、銀 思い浮かべ 激を今一度

見るからに頼母しい姿である。 の櫓だけは昔のままであるとか、

り、しばし皇居前の広場に休憩し れっきりになるであろう今日の感 ながら、生まれて初めて、或はこ 宮内庁を右に再び坂下門をくぐ 明人 る

70

村

海

五十六

崎

新 年•

• 讓 賀 福 1 中 井 尾 島 島 太希志 野迷路 石 庵 111

Ш 尚 111 H 珊枝郎 Sn 茶 哲



賀



指名犯女好き す

る

シロ

7

ンがきんきんひで、壁

重

口

5

2

シュ

アワー生きんが、あいたくました

百 Fi

株の値はどっちでもよいコッ

プ酒

W

ES

111

大久保和高

補聴器の感度へ棚の

鍋

から

落

ち

ri

洛外にて

句 を 州

せつなさよこの世に軍歌あるか 台風に負けるものかとまた建てた

STATE OF THE PARTY 柳近

選

麻

生

路

郎

111 巣 選

北

新婚の寝巻の紐もし

わ

から

ts

寝敷きしたズボン二人のぬる穿く 着替えれば言葉も変るカツギ屋

學品田市

内藤きさ子

病状の好転ひとみまで

3

え

る

マがママがと一人娘のマ

マびい

貝

堰

市

十メガトン想像出来。血の逆流

餌 3 あ n

むらさきを着ると心もむらさきに

大器晩成ならずチャンキャラが似合 同

死 di K M B 市

杉原

さぞや本望ならん妾

宅

菊

菊

菊日本の秋を独

0 0

愛鳩

音にする水も

遠 ^

枯山水後ろの

1

借

子を抱いた女

女

席 景 景

的

ず 入

A

治

市

越智

水

[1]

な

n n h ŋ

丸

尾

潮

花

ri 同 ri

貧

しさへ寒さ一足先

3

K

< 3

る

同 同 [ii]

高松宮緑から御見舞金拝受

大阪

rhi

花月亭

九里丸

学校の寄附を月掛でまでさ どんぶりを食うて残業赤字

to

炭俵夏から積んでい

い

ルフ場向うの田では

刈 6 密談になってスキャキ煮えつまり たてるとこは夫をたてている勝気

发彦

うちの社の

ホー

プとお茶扱のはなり

ッパイパ

ルされど君が代知らぬ人

福

岡

111

八勝七敗 胃。腑へ届くチャンコ鍋

Fi

支店長以下本

店

から

来 稲を <

3

掃

除 1)

ただく手のふるうは病気のせいでな

志を立てて扇をし 茶語家福団治君転向 ま Vi

込 7

同

電光ニューでの文字冷やかに冬に入る 大いなる妥協へウェディングマーチ 鳴る

> 百 同

> > 中杯

JII

下村水

市上新品

地平

関

感謝状無味乾 ページ増えたなるほど広告週刊誌 燥 12 下 3 れ 3 京 部 iti 都倉

求女

冨

1:

野

鞍

馬

ri

町三〇番地の二東京都港区麻布宮下

杉本 鶴

SII

部

佐

保

繭

黨東

一都

7中

八野

四区

同

;I 金 口 証 券

泉 萬 楽

本町二ノ六八九

-安川 福 柳社 永 泰 典

平

京 • 北大路千 本

三〇四号 日本住宅公団 18 36七六七

電話堺②七二三五番堺市九間町東一丁山之口筋 木 木 摩 徳 天 子郎

	ー ン 十	田田一	木犀の香で反吐をつく母子 手 帳 声層市	木犀の香で反	同	口姓に見栄が あり	じり貧という百姓に見栄が
はうにテクテク 歩く 夢 同 デバートにふりまわされる七五三 同のまね商人の手にあ ま り 同 女の順応襲長婦人の 板 に つ き 同		问	男の目を奪い	膝ぼんはずら	周	て居る時代劇 岡山	補聴器をして流
はうにテクテク 歩く 夢 同 デバートにふりまわされる七五三 同のまね商人の手にあ ま り 同	天子	森本思	惚れ河内長野市	申し分ないと	同	へ丼出して 寝	1
デバートにふりまわされる七五三 同		间	たい金づまり	造幣局の下請	同	ば用が足	守宅へ名刺む
	紫		秋で過ぎ羽男市	芸術の秋より	大八	跨がされが原	11
** ・		同	といって叱られる	から寒い	同	の地主が	秋日傭たのめば
1		同	思う齢になり		同	続審議に	テレビ買う話
ではいっていっているをは出き腹 (8 mm mm mm) 東流の引動によるは出きの腹 (8 mm mm mm) を立飲み してる 秋 の 質 一月	昭夫	近藤	人の母となり鳥取市	故里は遠し四		ふやして来具派	玉を買うほど
一方		同	話もして幹	株	间	てる秋の	牛乳を立飲み
のようにテクテク歩く夢 同 デバートにふりまわされる七五三 同 女の順な響を見るテレビ 2 2 8 8 8 同 テレビニュー x 2 6 同 と 3 3 3 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8		同	がガンで死	へ行か	同	にごらき	(筋にふれず-
	俊和	吉田	毒へ金がより命服	新聞に出た気	柳	テレビ児島	台風のそれて
のようにテクテク歩く夢 同 デバートにふりまわされる七五三 同のようにテクテク歩く夢 同 デバートにふりまわされる七五三 同		同		レピニュ	同	ない資産	暴落へじたば
日犬に引かれて 霜 を ふ み ★ 版 市 藤富 淀月 ライバルと呼ぶに家柄違い 過 ぎ ★ 級 乗 川又		同	いきり笑	ちゃん	同	へ出て教	ス
では、	庸児	川叉	い過ぎ要求	バル		れて霜をふみ大阪	日曜日犬に引
		同	もリバイ	裏返しして洋	同	女性が美し	6
ただ孫の守りだと有 難 し * 取申 西本 保夫 宴会の時間は 厳 守 し て 上 戸 青春県 木村のまね商人の手にあ ま り 同のまね商人の手にあ ま り 同のまね商人の手にあ ま り 同りほめられたのが気にく*** 同		司	社会学に生	샚	同	り間貸しす	厄介にならぬ
(株いちにんまいの口をきき) 同	凉人	木村	厳守して上戸青春	宴会の時間は	本	と有難し大阪	趣味はただ孫
の日のまね商人の手にあまり 同 のまれ商人の手にあまり 同 で儲けた話は仕舞 風 呂 同 で儲けた話は仕舞 風 呂 同 売れた手にきちんと菊が活けあずら 同 売れた手にきちんと菊が活けあずら 同 ようにテクテ ク 歩 く 夢 同 デパートにふりまわされる七五三 同		[i]	に係は転	ょ	同	んまいの口	いち
の一つ 医者 に 診 せ ず 兵 準 単 河原みのる ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―		间	ていて	悲しき習性な	同	たのが	85
けた話は仕舞 風 呂 同 荒れた手にきちんと菊が活けあず。 同商人の手にあ ま り 同 女の順応課長婦人の 板 に つ き 同野いても金は出き腹 & 山市 沖原 光雄 洗ろて喰う柿の味な り 故 郷 の 兵 ** 異 遠山テクテ ク 歩 く 夢 同 デパートにふりまわされる七五三 同	酔夢	三井	た友は再婚し番川	送	Z	者に診せず兵庫	2
商人の手にあまり 同 女の順応課長婦人の 板に つき 同聞いても金は出**8腹 蛭山甲 沖原 光雄 洗ろて喰う柿の味なり 故 郷 の 兵庫県 遠山テクテ ク 歩 く 夢 同 デパートにふりまわされる七五三 同		同	活けあ	荒れた手にき	同	舞風	コ
いても金は出 態腹 蛭山市 沖原 光雄 洗ろて喰う柿の味な り 故 郷 の 兵庫県 遠山クテ ク 歩 く 夢 同 デパートにふりまわされる七五三 同		同	の板につ	女の順応課長	同	手にあま	左官屋のまね
ク歩く夢 同 デパートにふりまわされる七五三	可住	遠山	の味なり故郷の兵庫	洗ろて喰う枯		いても金は出き腹を山	低ばり薬ばり
		同	ふりまわされる七五三	パートに	间	ク歩く	世晩のように

賀は欠礼いたします

西之町八三 大阪市東住吉区平野

橋本写真材料商

代

仕男

島根県平田市灘分町 一八二二

大手寺公営住宅四号 田 ス ミ 子田 田 ス ミ 子

大聖寺支部

野村味平方石川県加賀市大聖寺

浜田久米雄

支

部

唐津電二七一八

天子

ああ孤独とんぼの行方追って見る ぼんくらはぼんくらの味世を流れ

お隣りのたわわな柿を値ぶみする

×

雌

市

出原

風呂場からレジャーを楽し妻の歌

今 治

越智

農繁へ親爺は大声す

る

ば

かっ

1)

珍客へインスタントで淋し

過ぎ

神

戸市

岩井

教会をバックに善人らしく 女眼鏡かけてロマンスから

撮 遠

る

仙

台

市

平野

同

のらりくらりレジャー楽るの多忙

素通りがばれて嫁いだ娘が 母の香はもう失せ形見の寝巻着る やりくりに妻の座放棄したくなり 血圧を気にして腹もよう立 付 遣 は を 稼 職 <* 業 的 ts 泊 度 恐 UN k 7 顚 ず L 大阪市 貝 神戸 堰市 市 波多野 木村 護川 同 同 ri 草々 梢月 美由起 凡人の悲しさしゃべって気を晴ら もらい風呂花嫁さんが焚いてくれ いい先輩いい友人がいる文化の 銭の頭が懐 ドンパを口ずさみ娘は米をとぎ む 文化 11 0

小

義夫 千前 光道 工事場 親切の裏がこわいとひがん 内の子もそろそろ近所から 盛 今迄をご破算 赤ん坊のミルクに燗はまたされる タイミングよくすね羽織 飯 が へ砂利 生 盗 K 続 X L < は 7 糖 植 お 一つふえ で 尿 木 E 居 言 H 月 H 病 鉢 西 \pm Ź. 羽曳野市 和歌山県 级 B 島 TH 県 क्त 松島 井上 島田 木下 同 本南牛史 光 旭峯 一休

鈴木村諷子 蟠蛇 真奇 漫步 これ以上心配かけぬ 貧乏へ年期がはい AもBも今日から大 よく減った下駄がいる。風呂が混み 見るだけのデパート妻に誘われる 組違いヒヤリとさせ けむたい方の叔父さんは金があ た指 1 T 咙 宝 式 6 0 終 書 S < ŋ 吉 L 大阪市 金沢 Æ 拉 励 iti T 15 田辺 根上 嶋野ひろし 福井 同 百 好女 香花 竜昭

晩酌で

H

曜

百

姓

夜の灯に浸りリバ

イバ

ル身に

求人難打開でっ

寮 励 H

から ま 和 0) U

建 3 から Ξ 33

ち

大

酸

市

木村

太郎

近く事も小き 女の眼隙の

な ま

演 6

る

两

ġ

神

花美

塵

見

n

シャッターを待っ子供の鼻を拭き

高

Ш 口

勝子

運針のように登らす

九

+

九 8 ts 帰

折

大阪

市

堀

風

仙洞

咳込んで云い

たい事

を 技

部 女 T

る

同

早春の薄着が似合う

村 唄

Z

帰農した身にも海路の

来

B

取

県

亀

临

路地裏も新春らしい

ままごとの連続とい

3

X 健

-6 n

己

刻

前

rh

高橋

放心状態という一

種

0

康 生

法

£4

取

県

急カーブガイドは馴れた腰さばき

雑 社 BPT 倍 野 支 111 誌

大阪市阿倍野区松崎町3の10 電773935 (松江梅里方)

新请坂小松 上川江米沢 二田 田田 ABC 奈小良松 賀庸繁光文生智尚 恒梅 椒 鈍 也 介 坊 明 里 子 園 悟 峰 佑 雄 福 秋 薑 子 子 海 夫 子 芽

県英田 田 森三九八 勝 勝 馬 東與日報社内青森市長島三 森市長島三/二森市長島三/二

竹

原

山内

静水

同

同

A MAN AND A

4

秋風の 悪の道義理人情でし 顔と見栄はっきり見せる奉 心臓が二つあるよな値切り 父兄会挨拶抜きでは 我が子より手塩にかけたバラの会 御見舞にゆく暇はなくデート 七五三パパのお墓へ見せに お早ようをクシャミで返す雪の朝 人生はあっけないぞと事故 ポリさんと話せばノルマ訴 初物も肉も卵 肘鉄を一発う 丙午見えぬチョンマゲまだ 家中で休暇を当てに 英字新聞拡げて座席 何してんのか送金だけは 旅はまだ初日で汽車に飽き どうようは歌いしっこはまだ云ぎ 苦情だけ云って夫を 久しぶり会えば恋人 白紙答案よせばよい。ドバカと添え ツ脱いで寝る清潔を持ち続け 中 あの野郎までガムをかみ でニ b け X た ば U 尻 0 0 3 手 広 6 恋 8 ず 12 n を 5 ts か温娘 れ 賀 残 かっ 温 ま P る 現 え 古 L た 握 ع UN は る 帳 す る to 父 妻 L 場 I) 稀 ŋ き 0 n 話 神戸市 大阪 松 西 大阪 笠 高 \mathbb{R} 受级 大阪 大和點山市 神戸市 大阪 出 B 兵庫 西 江 野市 宫 岡市 知 寒 mi ĸ 172 県 725 府 rfi. 県 松本 樋口 松本 吉田 山田 須藤 小谷 村上 鵜銅 常岡 金 口 中 同 中 同 野口卯之助 口 百 同 111 岸 億 恵甫 祥月 大然 寿栄 峰永 隆史 蛙水 忠三 晃男 俊江 仙 石峰 孝風 雄水 鮎子 守 Ш 世智辛らさ教科書までも汚職をし 山脈が見えて郷里の 死の灰を降らして悦に入る 師 当選へ 無免許で一丁も行かずひっ あの顔でタイトのよごれに気きなず 高潮へ残した 勘当までされて添うたがもう別れ 求人難ジャジャ馬ばっかり集で来 わが家になったら地代が税が来る 継げという農業息子 丹前の首にカメラも 宿直にマネキン人形なまめ 社用族チッ みやげものよすぎて妻の色メガネ 電化したレジャー 大臣の目にはマアマアの豆 ハイヤーにはじめて乗っ子の笑顔 アル中が死んで身内もホッとする ネクタイ屋お目が高いおだて上げ ツィテナイ又としよりの日を迎え 電に乗れず マの声トンガリ通しパパの留守 走 風 な 赤 プもつけで切っておき る U 夫 屋 程 唇 0 台 腰 は奥様だけのも 震 鼻 風 気 旅 0) え 掛 舞 10 で 0 低 かい 3 民 な 7 b 逃 かい to 腐 V かり ŋ b 連 代 ts せ げ L 0 人 妪 大腹

111 雑 淀 111 支 部 大阪市東淀川区十八条町

早

清

生.

岡

県 市

桐山

清風

高木繁太郎

堺 和歌山県

軍軍

治郎

岩崎

岡山県

奈良県

木村よしを 久戸瀬春光

志

水

礼

司

大阪市

П

弘村

坂

田

東

洋

男

松 X 八尾 和 大阪

II 開作

雪美

森

花

村

谷本鈍愚坊

木 11 4 田 村 島 水 孝 + 夫 郎 洞

西 嵩 英

沖吉

隠岐

不酔

概 8

三上

木 条大 町 一市 倬夫恭躬伎**匡*水**匡 共 和公 三子三子子余:洞利

福岡市

泉市

末田

晃康

河内谷青花 本村珍ちく

吉田

博

富田林市

湖 守 大

開計 D 談

本村

樋

菊 電話 66 六六四四番 沢 小 松 京

大阪

万代句 松高

t

尾市

秀峰

39

昨市

府

泉洋



版 府 早 111 清 生

大

网

14

県

 \mathbf{H}

村

藤

波

島

K

thi

河

村

H

満

大

阪

市

場

没

食

子

担送車下り配膳上って来

りの明暗を捕えた句でしょう。 場面に行合わせ、 係ある人を見舞に行って、こんな 膳時間だったのか食事を運ぶのが のエレベーターで、丁度この時配 りたエレベーターかそれとも隣り ってゆく患者と反対に、 いないかの状態で自分の病室へ帰 む)で未だ麻酔が醒めているか、 て」とあるのは病院エレベーター つである。 没食子 エレベーターの下り、 句主はたまたま自分に関 担送車 句中「下り」や「上っ 勿論病院風景の句の一 (患者輸送車を含 患者と食事との 患者の下 Ŀ

るが、 い く感じられて一寸親し味が湧かな ゆく方)だが、この点はこの句と の解釈 下り」を私は没食子さんと真反対 かったようです。それに ても思えないので、 同じものとは私の経験ではどうし んなこんなで、 しては問題ではないようだが、そ ペーターが隣り合わせ、或いは 私には暗さの方が余り大き (患者がこれから手術しに 明暗の点もよく解 特に理解が遅 「担送車

床異夢の不幸の方でしょう。 でないことは明らかです。此の句 はかかる光景を見て物の哀れを感 は見付かりません。配膳の客も同 には明るい面も矛盾した面も私に 掬の涙さえうかべられたことと 藤波 儚ない世の中を深く洞察し、 一此の句はたんなる写生句

患者用工

レベーターと配膳用エ

ない。しかし示されたこの句につ

敬服している点には、

私も変りは

日満一勿論没食子さんの云われ

病院風景の句であるが、

益々ご健吟を祈ってやまぬ。 思う「此の人にして此の句あり」 生一この作者には川柳の古格

あっても、 あっても、 識と経験にまかせているのです。 よいので、 院に見られる衛生への無頓着さで であっても、 もっています。それが矛盾と明暗 に終らず、 も病院の廊下の片隅でのスケッチ はこの人独特のものです。この句 います。ことに瓢逸な外観の中に 的な作家として日頃から敬服して 日満 生の哀歓を深くにじませる手法 中に現代の感覚を生かした本格 一作者としての花村さんを 作者は鑑賞を読者の知 そのほか何であっても あるいはともすれば病 何かを感じさせる力を 世の中のはかなさで

と思う。

ようにとったがそれはどうでもよ 間も大体きまっている。それで僕 ば別に飛びついて頂く句でもない あったように思う、そうでなけれ い。僕には作者のねらいが明暗に の一致と云うことを考えて前述の は手術を終った時間と配膳の時間 時の場合は勿論別だが」又所用時 準備の都合上そうなるので、 る時間もきめられている。それは いては、 がきめられているし、 違はあっても、手術日と云うもの さ」というのかも知れませんが。 はパッと飛びつけぬものを感じま 験にまかせているかも知れませ の中を深く洞察」の点も確かによ おります。さて、藤波さんの云わ ん。しかし私は、この句に対して く解ります。又清生さんの云われ 没食子―病院によって多少の相 それが「知識と経験の乏し 作者は鑑賞を読者の知識と経 「物の哀れを感じ、 又別の感じで立ち向って 手術の始め 夢ない世

するのは言うまでもなく誤りで、 るよう祈りたい気が迫って来る。 日も早く退院苦境から抜け出られ かは知りませんが決して幸福でな 人であることは明かである。 清生―作者を考慮して句を評価 藤波一この配膳に向う主は何人

新居浜市宮西町 和歌山市今福東ノ 月 秋 月 原 町 宏 宵 一二八 0 方 明 六

長 高 長 佐波令字幸地 (号•并蛙) 高知県須崎 今治市港 野 橋 野 町 元 瓣 文 市 八 吾桑 T 蛇 İ 庫

木 九一番地 千壱番地野市 村 沢 暁 千 新川町容 常 盤明

弘 吳市吉浦中町 津 柳 一丁目 慶

林

野

甦

光

山口県柳井専売公社内 杉 鳥 取市 谷 職 潮 人 町 Ш

曲り・富士紡水源地社宅愛媛県周桑郡壬生川町大 野町九 京都市北区紫野蓮台 横

るほど深味のある、あるいは格調 この句が花村さんの代表作に価す 私が先に作者の句風を述べたの 対する日頃の心構えに打たれるの に、興味をひかれ、作者の川柳に 深く採り上げたといううような句 りげない対比、小さな驚きを注意 を作りがちだから、このようなさ 意図の露出した、ぎらぎらした句 でないでしょうか。私などとかく すが、性格はよく現われているの 高いものだとは思っていないので 徴に触れたかったからです。私も この句を通じて花村川柳の特

仮名であるのが私には特に親しめ あり、丁度五という区切りもあっ きているかどうか。こんな不安も 処だが、果してそれまで確実に生 年。あと二年もすれば喜寿と云う であろう。下五の「誕生日」が平 日満―古稀の祝が終って更に五 七十五自前で祝うたんじょ せめて誕生日位いとなったの

くなったろうが、古稀や、喜寿以 近頃は環暦祝なんてする人も尠な た、それにしても七十五は長命だ 没食子一戦後人間の寿命は伸び

> から、 くまい。しかしそんな吉祥のない 飲んだと言う表現が愉快だ。 ってもこれからの一年は中々に保 くるだろう。経った一年は元気だ この辺りから愈々老化が目立って 時は自費の誕生祝も年齢が年齢だ 上ともなれば子や孫が捨ててはお は出来ない、所でこの句自前で 仕方もなかろう。七十五才

る 感謝している好々爺の姿が目に浮 億してくれず祝ってもくれないの 当の本人はまだまだ元気。誰も記 ているのも当然だといえる。然し 子孫からもう誕生日など忘れられ モラスで実に面白い。高令のため んでほはえましい。私は同期す な祝杯をあげて自らを慰め健康を に一沫の鮫しさを感じ、ささやか 藤波―自前で祝うの表現はユー

とがありましょう。この句は後者 の考えを広く万人に訴え読者の共 あきらめを感じさせます。下五を られた老境にある者のさびしさと ぎをひそかに句帖にとどめる場合 鳴を得ようとする場合と、生のあ たことによって、老人の環境と心 かしとして自らの足跡や心のそよ 「たんじょうび」と仮名書きにし に属するものとして周囲から忘れ 清生―作句の態度として、自分

の句に対しては、私は没食子さん 知れませんぞ。しかし示されたこ ことになると、私もそうである もうひとつ心打つものが感じられ したものでしょう。しかしそう言 理ないし肉体的状態を表わそうと ないのですが。 った心遺いにもかかわらず私には 日満一「心打つものが」という

られるし、僕は孫はどうであろう り中七にありましょう。藤波氏の げられた生命がある。 思うと解しましたが、これは枝葉 とも子供は忘れず捨ておかないと ます。喜びと言うか生命に対する の問題で要はこの句中七に取り上 など忘れられている、と解してい る、藤波氏は子孫からもう誕生日 言うようにユーモラスも十分汲め 一種の誇りに近いものも感じられ 没食子―この句の良さはやっぱ

う私には特に身近な問題でもあり す。センターの建設も必要でしょ とりあげられて居るのも当然で なりがちです。老人問題が大きく 藤波―老人は家庭で兎角孤立に

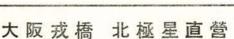
頭にピンと来ました。

同調だし。兎に角、佳句秀句とし の意見にも、藤波さんの意見にも みがもてます。 ての意見より、この句に対し親 他のお二方もそうであるかも

そのものにきびしく迫る前に、 この句成功なのでしょうが。作品 の価値は私なりに認識しており、 はないかとも思うのです。この句 が、句に対する評価を妨げがちで と、みなさんの共感を得ただけで また共感が文芸の基本だとする われは老境を詠んだ句に寛大で、 間違いないのですが、どうもわれ この句の生命が中七にあることは 般的にそういった境遇への感慨 - ちょっと待って下さい。

この句に対しては、あるいは的は ずれなことかも知れません。 といった構えた句ではありません 化しつつある老人福祉対策を衝く に残すべき句で、決して社会問題 りのあろう筈はなく、またこの句 問だと思うのです。と言っても作 者もとより練達の人で、構成に誤 トリピアルに過ぎるという批評も し、逆に詩的な高まりが少いとか も名句件句というより静かに句帖 材に親近感を抱いてしまうのは疑

担当。真鍋一瓢





白濱温泉やわらぎ台 光

6 7 7 5 白 浜 温 泉 大阪案内所 (64) 1 2 電

淀

冨 士 亚

馬

姉川で深く負けたは浅井知恵

八五)

姪にあたる。 長の妹である。つまり信長の 母はお市の方といい、織田信 淀君は、浅井長政の娘で、

にしている。

姉妹の縁語をかけて狂句

その後、お市の方は、三女

信長は、徳川家康と連合して 天正元年 (一五七三) 織田

(一五八三)

勝家は羽柴秀吉

その姉川の合戦を、 姉川へ妹聟を攻めに行き 川柳は

川の名は姉敵将は妹智

姉川で 織田目にならぬ妹聟 妹智を姉川で切崩し (* 1 二四 八四

おもしろく詠んでいる。

(タル一四〇)

ある。 が七歳の茶々で、後の淀君で のであった。その娘の一番上 娘とともに引取って保護した である妹お市の方は、三人の 城で自刃せしめたが、その妻 長政を江州姉川に攻め、小谷 に引取られたのである。 々は十七歳、二人の妹と秀吉 でともに自刃した。その時茶 に滅ぼされ、越前北の庄の城 と再婚したが、天正十一年 をつれて信長の重臣柴田勝家

二十七歳で秀頼を生んだので され、二十二歳の時側室とな ある。それからは、 淀の局と称したが、後、淀の り、その翌年、淀に城ができ 越えて文禄二年(一五九三) 生んだが、八月に夭折した。 君と呼ばれた。天正十九年、 てそこへ移った。それで淀殿 (一五九一)四月には傷松を そうして茶々は、 秀吉に愛

は家康のものとなった。 三成は徳川家康に敗れ、 てなおも家康は、大阪方へ圧 関ケ原の戦いがあって、 つれて大阪城へ入ったのであ 慶長三年(一五九八)秀吉が なくなり、その翌年、 その間に朝鮮征伐があり、 慶長五年 (一六〇〇) 秀頼を そし 石田

力を加えるのであった。 強い方も お酒に弱 気分よく リポコールを い方も お酒を楽 しむため THE RESERVE THE PROPERTY OF THE PARTY OF THE

●強肝と若さと栄養に 肝臓障害を防ぎます お忘れなく 思酔・二日酔を防ぎ * 疲労・休力増強・ニコチン中毒

臣秀頼は二十二歳になってい た。たまたま、京都方広寺大 慶長十九年 (二六一四)

片桐は質を出す気で利を並べ

(* | 六三)

(タル一四三)

であろうと、 家康を調伏しようとする底意 の銘の「国家安康」 仏殿の修復をして梵鐘を鋳造 詰問をうけ、 したのであったが、その梵鐘 家康から厳しい そのほかにも難 の文字は

島に居た。

題をもちかけられた。 そこで片桐且元が、 何ンぞあったらの所へ鐘の銘

である。という且元の名案に そうなればまたこちらから打 に老人家康は死ぬであろう。 年はかかるであろう。その間 引かせ、その竣工までには三 に 怒って、これを拒絶した。 もかかわらず、淀君は却って おけば、豊臣家は続いて安泰 カ条の申入れを素直にうけて つ手はある。今家康のいう三 に、淀君住居の御殿を造るの りをすすめた。品川八ツ山 赴き、家康に会って、 のに淀君は承知しなかった。 江戸八ツ山住居とするという 一つに、淀君を人質として、 て大阪へ帰った。その条件の つとめ、三カ条の要求をうけ 且元は、極力淀君に江戸下 淀を為替と御工夫の一ヶ条 いろいろ注文をつけて長 弁疏に 7)

西一ノーーハ

• 謹 賀 新 年•

川雑玉造支部一同

米子市富士見町一三五小西方 川雑米子支部 F 関 東京都日黒区芳窪町町 市灘区高羽楠丘一〇一 桜市 仲 大阪市城東区今福南四 四 木 西宮市甲子園四番町 禁 田 岡 JII Ш 柳 じんたく th 不 柳 遠 宏 子 志 水

勝てぬ筈評定の度犬がほへ

出生地(七)職業(八)電話(九

(一)姓名(二)雅号(三) (四) 現住所 (五) 生年月日 (六

などと川柳にも詠まれ、「市 六夜には至極のとこと市の正 (> 111) 三九

市正質蔵に手間取る気なり

10

正」はイチノカミと読み且元

酒

ったのである。 待」には、月を拝むのに賑わ のことである。品川八ツ山 片桐もこまるは質とかねのこ 七月二十六日夜の「六夜 (タル七五)

ついに且元は、家康へ内通 片桐が為には茶々の局なり ("二四•五四)

下ると当る大阪の立おやま 下らずはたく大阪の立おやす (タルー | 三)

籠って自刃したのであった。 者と疑われ、茨木の居城へ引

た。淀君を立女形に見たて川 一年後には死んだのであっ いに作られている。 片桐のいった通り、家康は (州一六六)

家康は内堀も埋めてしまっ 惣堀を埋める」とあったが、 った。その条約に「大阪城の れは大阪方の屈伏で和陸とな た。これが冬の陣である。こ 川の大軍は大阪城へ押寄 月、遂に手切れとなり、 慶長十九年 (一六一四) せ +

> それでまた慶長二十年(を埋め(タル四八・一四三) その筈ぢゃないという間に掘

大阪屋眉間の白い犬を飼ひ かい犬に喰付かれたは大阪屋

安

五

川柳もそれを詠み、また、 淀殿は帳台浅く出てしゃべり 大阪の潰れは淀の口車 (タル一〇三)

淀君が軍議にも口を出して 淀の薬研で粉にされる難波計 八六 九六

真田幸村、木村重成等の名将

月、淀君は四十九歳、秀頼は 滅びたのである。思えば、浅 の奮戦も効なく、夏の陣でつ は平家の流れ、家康は源氏の 奇しき運命である。また淀君 の居たところみな落城とは、 そして大阪城と、茶々、淀君 井の小谷城、柴田の北の庄、 いに大阪城は落された。 二十三歳で自刃し、豊臣氏は 慶長二十年(一六一五)五

清

灘 ・魚 崎

大塚合名会社釀

六一五 淀君は、大野道犬の息子治 五月、 夏の陣とな

長を籠愛していた。 夜軍の秘事大野は申上げ 浪花屋の後家犬の子が大秘蔵 (タル一三九

吐いて、大阪落城にみちびい 出て、淀君に気に入る議論を たといわれている。 かく治長の父道犬が、会議に と川柳にもすっぱぬかれ、と 胴の間へ大野を乗せる淀の舟 7 九二 (タル七八)

現

代

柳

錄

三九 達

堰 子 川柳に手を染めた年月

趣味(一一)配偶者の有無(一二)

自信の句一句(一〇)川柳以外の

昭和十四年頃。
 蹟古美術探訪
 (一一)
 有(一二)
 が呼んではる中のれん(一〇)史 業(八)――(九)こいさんの眼 19日(六)大阪市(七)アパート 丁目十六番地(五)明治37年2月 (一) 伊達順治郎 (二) 堰子(三 (四) 大阪市西成区山王町三

100 米 浪 進 Ż 助

年五月 旅行(一一)有(一二)昭和三十 墨をすり(一〇)生花・柔道三段 九番(九)いまの世も畏まる日の 日(六)埼玉県大里郡妻沿町日向 一丁目二三(五)明治41年2月8 (七) 化粧品製造(八) 億七五二 一)米浪進之助(二)同上(三 (四) 大阪市生野区新今里町

101 西 田 柳 宏

裔でもあった。

別号 だありません(一〇)尺八(一一) 宏子 (三) 美峰 (尺) (四) 大阪 (一) 西田宏 (本名茂) (三) 柳 (三) 柳 (三) (三) 柳 (三) (三) (四) 大阪 有(一二)昭和三十年夏 大正9年3月2日(六)横浜市 市阿倍野区北昌西一の一一八(五 (七)会社員(八)――(九)ま

下特約販売店

哈 動 株 重 江

岩 彦 本 真 専務取締役

尼崎市昭和通二丁目四八 電話大阪 (48) 局 3308 (代表)

續



会 料 理

宴

そうである。 を廻らなければ一流とはいえない 重役ともなれば、一日に三つ宴会 々会等々名目は色々ある、会社の れ忘年会、やれ新年宴会、やれ何 で一番宴会の多い季節である。や 年末から年始にかけて、一年中

松の内まだ一軒を飲み残し

しなければならないと思う。始め の出し方について、色々と工夫を ければならない。だから宴会料理 で、料理とにらめっこをしていな お預けをくった犬みたいな恰好 たり、出して見たり、お客の方は め、おかん番はお銚子をつけてみ ない。せっかくのうまい料理も冷 ってからでないと、宴会は始まら って、またそれに対する謝辞があ 又、来賓の祝辞が四つも五つもあ んのアイサツなんてものがあって ない。開会の辞があって、会長さ ツというやつほど、いやなものは この宴会のなかで、例のアイサ

水 竹 荘

ころが多いのである。だからとい 亭の方でも、汁だけ位あとから出 と、中々そううまく行かない。料 た方がよい。ところが大勢になる を並べておいて、火を使用するも わえる事と思うのである。 分か三分、二三人でやるようにし 智やユーモアに富んだものを、二 三方迷惑なものを、どうしてやら 迷惑はいうまでもない。こういう 分だし、まして聞かされるほうの によって渋々やらされるのが大部 らで手間どるし、やるほうも指名 選の難かしさやら、交渉の手段や かないのなら、二三人にしたらよ ってアイサッをやめるわけにはゆ して、始めから全部並べていると 始ってから、順々に出すようにし の、汁、煮物、焼物等々は宴会が たら、もっとうまい宴会料理を味 なければならないのだろうか。機 いと思う。主催者側としても、人 お目出たの盃ならとちょ

> さつ 好敵手来て盃を持ち直し 名士芸三日仕込みとごあい

宴会を抜けて逢う夜の恋が そと枝 里

賀新春

岩

临

爱

謹

八番地(阪急京都線長岡天神駅下車)

京都府乙訓郡長岡町梅ヶ丘二丁目三十

天皇陛

正 月 0 料 理

う。皇室でも新年には料理を中心 番御馳走をつくり、酒を飲むお祝 料理は、日本の年中行事の中で一 に御祝いになる儀式がある。式膳 いでは正月がやはり一番であろ のが面白いと思う。とりわけ正月 して、昔風であり、 止月の料理というものは依然と お国風である

ら、賢所、皇霊殿、神殿に、年頭 下は午前四時ごろにお起きになっ 初の拝礼をなさる。いまでは神事 ょうど東の空がしらじらと明け初 めるころ、 て、まずお体をお清めになり、ち それによると、元日は、

和と国民の幸福安泰をお祈りにな は皇室の私事になっているが、平

んなの暮しが明る セキスイのプラスチックス

積本社 水化学 大阪市北区市長町1

味の散歩という本に書いてある。 上けると大膳職主厨長の秋山氏の った料理を新年御祝料理として差 といって三カ日は、 朝、 晩、きま

と受け

陽 子

なみなみとつ

がれ

一から出

末席へ名指の盃廻

玉米

枝

伊勢えびと砂糖煮の勝栗を添えて

すすめする。二の膳には、小形の

とえば突き出しか、刺身、 には冷えてもよいものばかり、た

> これが皇室のお正月料理なのであ をおつけになって召上がるので、 で召上がる形式をなさるのであ るのである。 は両陛下おそろいで、実際にハシ 御祝料理」を差上げる、このとき る。それから午前八時ごろ「新年 は正式のお儀式で天皇陛下お一方 から
> 嗜御膳の
> 儀を行われる。
> これ こうして元朝をお迎えになって

> > 吉

H 主 井

堂

皇室では「お祝いおかちん」とも びら)を、お祝いになる。正月料 二切れを重ねて盛った皿に浅づけ いっておられる。それは鯛の切身 大根二切を添えて、本膳としてお (ひしはな さんぱつは 何はともあれ 五四二二二一番〇

理のお祝いの主体になるもので、

まず最初に「菱葩」

寺町北一ノ十八

男 前

寺 浜 支 Ħ

JII 誌 社 柳 雑

四方拝をなさってか

れが朝の皇室のお正月料理であ る。その他にお祝菓子がつく、こ 雉子酒(キジサケ)をおすすめす

古き世の日本の匂いが残っていて おくゆかしいものであると思う。 かえって簡単質素とも言えるが、 正月は冬枯の季節であるから、 元日だ米ソのことは忘れよ るものを 初日の出 時の流れをハッキリ知った 民間のお祝料理にくらべると、 自由はここにあ 郎

新鮮な野菜が缺乏している。

だか

ヨロコブ、田夫の黒豆は農夫が健 使ったものなどがえらばれてい 保ちする料理法をとっているの 康に働く、黒くマメマメしくあり る。数の子は子孫繁栄、田作り る、いわゆる祝肴がそれにあた を濃い目にからませたもの、酢を 仕事をひかえるという習慣から長 が多いのである。正月三ヵ日は水 乾物などの保存食料を扱ったもの たいという意味がふくまれている っぷり含ませたもの、砂糖や醤油 で、よく火を通したもの、味をた ら庶民の生活食行事にも根菜類や (ごまめ) は五穀豊稔、昆布巻は

箸紙の順に元旦坐らされ 飲んで寝るだけの不惑のお

元日も勤める父がものたら

や型が、ほとんど二三種類で、ど

理 2

水

又格別のものである。 な器に盛りつける時のたのしさは 料理をこしらえて、自分の好き

日本ほど食器の豊富で、種類の多 の調和の美しさにあるのである。 れる時もある位、 箸をとる手を止めて、じっと見と ンスと手際によって、一層強調さ とながら、器へ盛りつける人のセ れる。料理の美しさは、しばらく 日本料理の特色は、味もさると 色彩と器の色と

堂 ラス器など多方面にわたり美術的 工芸的に工夫されたものが沢山あ もる皿、鉢など、又食器の材料も もる器、煮物を入れる椀、焼物を 漆器から陶磁器金属類、竹器、ガ の器が選択、吟味されて、制身を るが、日本料理は一品ごとに、そ の料理も同形に近い器でことたり

理を芸術料理ともいえると思う。 うところに、日本料理のゆたかさ があるので、この意味では日本料 食器というものを、縦横にあつか この質量とともに豊富な日本の 女客手料理一皿ずつほめる

珍らしい手料理山 おかわりへ上品 一泊の寺でおいしいきうり 料理に盛り込ま すぎる飯の は山の味

內服

でな

おす

ザイ株式會社

潰

を

始めた。 器が用いられていたが中世紀にな てから漆器類が食器として使われ って、仏教の料理法が日本に渡っ 昔の食器はもっぱら木の葉や、土 魚鳥料理の発達してい

なかった

護

智

新

年

島

生

4

庵

島

小

石

仲大

之阪

町市

二南

OX

番鰻

地谷

すっ

I.

日三一六回使用致しま ます。一回四錠ずつ一 く胃痛を迅速に和らげ せ且つ副作用は全然な り新しい粘膜を新生さ てニッシェに肉芽を盛 潰瘍の創面に直接働い

なった、更に鎌倉期から桃山時代 統一色からだんだん色彩も複雑に 塗などが出来るようになり、赤系 変化して、根米塗から溜塗、春慶 えているが、漆塗の方法も次第に る朱途の膳椀類がその面影をつた 現在、寺院などで用いられてい

> のである。 段と華やかさを増すようになった にかけて漆絵に蒔絵の技法が発達 し、食器もこの技法によって、一

おめでとう

原

広 島 県 竹原局区内

川柳

ございます

会

同

るようにしたいものである。 来たわけである。要は食器と料理 らされ、千差万別の食器が生れて になって、がぜん一大革命がもた がうまくマッチされて、料理が引

真

鍋 水

峰

其後、陶磁器が採用されるよう 食器の美しさが発揮され

iti 賀 新 春 松 若 中 大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇 本 島 大阪市南区鰻谷仲之町二〇 江. 西宮市津門西口町五〇 多 生 梅 久 4 里 志 庵

と、一度の宴席で使われる皿の質 ではないでしょうか。西洋料理だ い国は、世界中あまり例がないの 錠 一〇〇錠 七〇〇円

中 中



トラ歳 0 お 正 月

これはしたり、晒のまわし一つ、

えそうな眼でホテルを出て来る方 ものですね。お陽さんが黄色に見 ますが、ゴム張りのトラホテルに てお巡りさんに又お近いうちに は多少色っぽいけれど、一札かい 収容されるようになると一寸困り って神農さんの虎位の愛敬があり (まさかこんな事は云わないでし (女流作家三人集

は Ш 真平 111 阳

茶

1 ラ

りのある話でもいたしましょう。 ラ、小トラにはぞっとします。 ったし私も飲みませんから、大ト もよくない。父もあまり飲めなか 好きになれないしトラ刈も見っと 向魅力を感じません。豹の毛皮も わけにもゆきませんから虎にゆか 真平ですよ。と云って何も書かぬ 「トラ」になりたいなんて減相な 動物園の虎にも名画の虎にも一

いう語です。これなんか稚気があ 夫は車が引きにくくて往生したと 足をバタバタやるものだから、車 っ子のようにブラリと下げてその とずり下り蹴込みへ座り足を駄々 そんなら、わしゃ三等でええわ、 らと抱くようにして乗せたところ る車はいらんと云うのを折角だか がむかえに来た、わしゃ歩いて帰 れますがこれもその一つ。 る人があってお酒が大好き。その ためいろいろの逸詣を残しておら 御きげんの処へ昔の事で人力車 友達のお父さんに村長をしてい

心斉橋大丸北の辻東へ

FF TEL 27 6684

御集会には階上御利用下さい

SEZRYU

西 出

栄

ありました。中座の楽屋で五郎が 狂言に「張り子の虎」と云うのが 消しです。 亡くなった曽我廼家五郎の当り

ょうが)なんて送り出されては艶 らないのです。五郎は感ちがいし ずふき出しましたが常からゲラの よく肥えた体と小さな丸髷と、ふ もないらしく、私の笑うのが不思 衆も見なれているから、おかしく 情やなァ」とひやかす。床山も男 裸を見て恥かしがるなんて割に純 くで「と云えば」医者のくせに男の んのだと思っているのです。「レ て私が恥かしがって額をよう上げ 私のこと、笑いが止まらず顔が上 で思わぬ寸劇一幕と云う処でし トンとしているところで幕。楽局 識だと云うような顔をして、キョ デーの前で失敬な、何かの折に書 ンス三題話にもなりません。思わ るのではありません。 ましたが、決してトラになってお た。どうも思にそぐわぬ事をかき んどし、アンバランスもアンバラ

虎の年父がおったら九十六

私 もトラ なりた

大酒飲みになっていたかも知れな 酒が好きです。心臓が強かったら お酒が飲めない私、でも私はお いつだったか氷で割った梅酒

研究会事務所 西

支部事務所 三

電船④

油 ・ 一七六七の 明和病院の 明和病院の

事があった。心臓が怒濤のように一杯乾した揚句大騒動をおこした ざわめき、それ以来クリスマスの を口当りのよいままに、カップに

顔をしている。羽二重で眉をかく

せっせと鏡台の前でお虎婆さんの

塩の小さな丸髷のかつらをのせ

しこれで化粧はOK、男衆がゴマ

る。五郎は楽屋着をさっとぬぐと

すき 焼と 新年宴会 鍋 13 料 は 理

森下愛論

竜田大橋下車 3900

古谷まさる

静夫

予約申込み受付 酌は有芸 仲居 揃い料理は一流値は三流 大阪連絡所 電話竜田一六二

ラになり度いことの多々。 末。酒は飲んでものまないでもト ぶどう酒も飲ませて貰えな 竹莊、竹 た 大王寺の へ ステン 5 始

うて喜んだらええやないか。下手 腹から音痴でないよう生んでもろ 他の者まで音程が変になるらし でも音痴でも勝手に明うてるの 云われると腹が立つ。「音痴のお は自分でも意識しているが、人に い。それ程音痴なのである。音痴 る」と、声を揃えて邪魔をする。 んの上手はもう解ってる、解って 母さん、やめといてんか。お母さ 私が歌を唄うと、息子達が、 してもらいましょう。 さて何からクダをまこうかな。

和柳 指 川雜 柳誌 研社 究支会部

文部長 西尾青一 河相すい

仲中山末池三樋松山木小本酒野橘 吉川 高川 田上口島村田浜城井呂 高 照太半花文美寿光正留牧弦丹鵜 風 見郎歩美女路栄一雪三人月謡汀子 内林鳥村安村川室門菱吉塚樋 海 本上田上村田永田本田口村 敬夢 夕義球山千三満善東舟、 太虹泰鈴子絵友尋舟秋風雲遊む

許しが出たからは少々くだをまか

れてしまう。けれど編集局からお

素面でくだを巻きゃ気狂いにさ

洞生巢

資掘

風

事物 幹事

小野木凡平 西口 竹 志

大阪遞信 病院

鳥ケ辻川 柳

林草

市場没食子

会長

若

会

泥 金 集

日本橋新らの草鞋をきゆと締め

同 同

ふり出しへ戻る覚悟で別れてき 人生のサイコロ又も落目

子

なり

惠

捜査陣またふり出しへもどっされ 獄窓を出てふり出しの青 い

170

きる子

ふり出しに戻ればくちる父母の顔

同

ふり出しに戻れぬ意地へ馬力かけ 振り出しはここの会社でお茶をくる

栄

ふり出しに戻る気離婚宣 ふり出しでつまずき男はん嫌い

ふり出しのサイコロー生ナラマーマン

出直しても一度やろうと云うファイト ふり出しからやれと恩師は手をのばし ふり出しが大事よあんたまだ若い

清 同 徳 同

7

次回 題

炭」が切一月末日

葭 乃選

ふり出しははちきれる程望なら ふり出しは三年という顔をかけ ふり出しに立った二人へ云いきかせ

同 同

茶

焼け出され

+ 年前

0

素

裸

甫

ふり出しは釜ヶ崎じゃと工場長 ふり出しへ戻りましょうと妻けなげ

カネ女

この手だなと思うと腹が立つ。角 ぬかりなく私をもてなす、ハハン

ふりだし

で夫は至極上機嫌。だがそれか る私の気持ち、人の気も知らない 24 五日は黙否権を行使する

を巻き出したで。」とからかわれ いきりたてば、「おふくろ又くだ や、税金かかる訳でなし……」と

それに、うちの主人と云うたら



く。その口実はふるってますの。 や、アルサロなど転々と遊び歩る ないのに、大阪中のナイトクラブ 数え年六十三才、お酒も余り飲め

「雰囲気にひたって英気を養い、

のが常です

も内にいる者には、わかる筈はな 訳をする。どんな云い訳をされて 今度は友人に逢うたからと、云い

い。外出しての帰りなど私を強引

ら……」ですって。あほらしい。 前を一生悸せにしてやり度いか 気を若く持って、事業に励み、お

或る時は、お得意様サービス、

うに遊んだはったらええやない まだまだもてると思っているらし か……。」と、たしなめる。俺は んは先がしれてるのや、 して叉妬いてんのかいな、お父さ いのが気の毒にも思える。美男子 長男が「おかあさん、ええ齢を 思うよ

に紹介する。女給は商売々々と、 に同道させる。そして馴染の女給

> でない夫、お札にサービスされて いるとは気付かぬらし

は 捐

女

警察に トラ専用の檻が出来

酒

田

清

ことに関してはすべて男本位に出 来ている世の中、まことに遺憾で も行ってと言う手もあるが、遊ぶ とだろうに、男ならアルサロへで と一杯ひっかけて思う存分言いた 眠れぬ夜の続く私。こんな時ぐっ い事が言えたら、さぞ胸もすくこ 苦労性なのか一寸したことにも

あっては面白くないし、一カ月の よいのか、女だってアルサロでも一体女は何処で羽根をのばせば 給料を一回の遊びに使ってしまっ と言うが、サービス係りが同性と お茶屋遊びでも出来るじゃないか

子 ては家庭はめちゃめちゃ。

ものに取っては恨めしい限りであ とになるだろうが、真面目に働く のか、結局は甲斐性なしと言うと な矛盾した生活を一体誰が強いる 根の高値には脅威を感じる。こん 物価の値上り、野菜類、ことに大 い。最近のわれわれ庶民の悩みは るが、安月給ではどうにもならな 化生活が良いことは解りきってい 見てお好み焼き位の散財が今の私 には関の山である。電化生活、文 これも出来そうにない。映画を

▼友の会新春句会は1月2日

ふり出しはどうであろうと添いとげる ふり出しへ戻り四十の婿 ふり出しへ戻り気楽な長屋の灯 ふり出しにもさったスゴロク泣いて勝ち ふり出しへ戻ってみたい倦怠期 ふり出しの任地へ恋を残して米 ふりだしを噂の種にされる今日 ふりだしはコネで就職したけれど 賽の目に祈りをこめたお 十二月号ご参照ください。 銮 元 日 好 白 俊 美 友 同 同 同 女美 ZE 喜 子

ま とう ざい 7 お 8 C ま

で止めて置きましょう。

したい。くだらないクダはこの辺 がぶがぶ飲んで、愉快な人生を過 れて来たい、じゃんじゃん儲けて だろう。今度生れ変る時は男に生

こんな悩みも男なら半減される

川雑婦人友の会連絡事務所 吉市八竹小 内 光酒西 高 太中山麻 田川場木 田出 奈 良 花富 3 S 徳 由白 陽清一操良小阿葭 女夢子里栄晴子子美子じ子喜子女子子子子女子子栄子子石茶乃

婦 人

川雑 友 0 会

講 41 座 70 6 研 究 題 0

ho giri'

龟

清 水 É 柳

句も佳いと思いました。 その老母の横額には満ち足りたも のがあります、ユーモアのある作 る温かさを感じさせられました。 いたわりの眼で見つめられて居 で生やし しわくちゃの老母口ひげま

アンの一ト切れを半分に手切って しています。 で動くという措字がこの句を生か ることで想像させられます、耳ま 口へ入れ、それを楽しんで居られ 健康な祖母であることは、タク タクアンへ耳まで動く祖母

感じさせる句です。撫でに来ると いう下五文字が成功して居ます。 ろうか、ほのぼのとした雰囲気を 撫でにくるのがお孫さんでもあ でに来る 照 児 苦労したしわだと言えば無 着想のひろさを感じさせられま ますと借り でに来る 助かりますという会話を入れ わくちゃの風呂敷助かり

ようになって居るようです。 も動かない字句です。 に、うがちを感じました、敬老会 たのでこの句に深さが感じられる しあわせそうなといったところ 敬老会体せそうなしわばか

合を感じさせます、それは、お互 少し表現に苦労してほしいと思い 作者の意志は感じられますがもう な心理を表わそうとして居られる があるようです、男と女の対照的 して居られるからであります。 いにということばで老夫婦を表わ 年令を句の上にあらわさずに年 パパとママの使い方に少し無理 顔のし お互にしわのことなどもう わあり持つパパ嘆く 游観堂

す。そこに川柳の面白さを感じさ 平均寿命という語が生きていま しわの顔平均 与寿命にまだ間

> とが出来ません。 持っていないのでそれを感じるこ りません。しわのよる迄何してた うだけでは句に仕立てる意味があ 屈っぽくなったようです。 せられます。 と自潮の句としては訴える何物も しわが気にならなくなったとい 俺六十しわのよる迄何して 歯も弱りと説明した為に句が理 五十過ぎ しわが気にならなくなって もうしわを気にせぬ程に歯

老女言うし 耐えて来たしわ深々と残る わは苦労の年輪

1しわのない札お年玉にとっ ないでしょうか。 ので失敗しているといえるのでは はないのですが説明が親切すぎる どの句もそうであることに違い

2 しわくちゃの札で借金返し ておき

3 札のしわ延ばして煙草のつ 4 しわくちゃの札から先につ とき りを出し

5 しわくちゃの札選って税金 に払い かっとり わのして香典気持ちだけ Y

7 札の 6 包み 貯め 1の句も2の句もだれでもが気 わ伸ばす気持が金を

この句の場合はのばす気持ちがと 屈っぽい事柄を上手に句にまとめ うのがよかったと思います。その りないようです。4の句は、先に す、3の句は煙草屋さんの姿を浮 るという事が出来ます。 いう中七文字によって敷われて居 のような形になり易いものですが 二三枚の札のしわをのばす情景が ますがそこに税金に対する心理を つかっとりと人事のような句にし て居られます、こうした何は格言 しのばれます。7の句は非常に理 た。6の香典の句も気持だけとい に払うのはオーバーな感じであり たのが失敗でした。5の句の税金 き出していますが、少し深さが足 のつくことで平凡さが目につきま もりこんだのが面白いと思いまし

知らず かわれ 敷伸しのしわへ寝相をから とんでもないところに寝押 ポンしわがより ラツシュアワー 服のしわ酔うての後のこと しのしわがつき 引きのズ N S W

けの句でしかないといえそうで というのは面白いと思います。 の句の酔うてのあとのこと知らず いろに言われて居りますがそれだ す。寝押しではありませんが最後 寝押し、寝敷き、敷仲しといろ しわだらけの百円札と釜ヶ崎は うり氏 パケットを音にして出すし わの紙幣 百円の札もしわくちゃ釜ケ

心斉橋筋大丸前 電話分三三四四番

思いました。 いる状態がよく表現されていると 語が活かされています。何枚かの ットの句は音にして出すという句 えた句という感じがします、ポケ あまりにもつきすぎて居てこしら わだらけの紙幣を手で探ぐって

1 らしいし マンポズボ 2 坐らせられた

3 訪問着しわを気にして立 2 畳はよいがズボンのしわが 気にかかり to

4 席空いたままはスカートに しわがつく

半端です。道端での立ち話ならし 事柄を持って来て畳を想像させる 畳にすわらねばならない具体的な 2の畳の句はたたみと言わないで 膝頭の出るのが気になるようです わを気にする必要はないわけです ようか。3の訪問着は作意が中途 句にした方がよいのではないでし し、訪問先でしわを気にしての立 マンポズボンはしわというより わして居られるのが成功した原

わのこと言われて美容院

したしわがすぐ

大阪府南河内郡美原町

丹上四〇四

清

小小白柳

4

3 なまけてたそのし 2 しわ寄せはいずれこちらと 1 しわ寄せを皆仲人に持って せの句をよせてみました。 ぜわしさを表現しようとしたので 判るのですが時間表で旅に出る気 しょうが少し無理が感じられま いわれそうです。5の作意はよく てこそ句になるのですが浅い句と けません。4の句は海水着であっ なことを想像させられますので頂 は面白い着想ではありますが不潔 まで表われて居りません。3の句 5時間表にらんでアイロンし 3 2 ズボンのしわ妻も 1 しまい方粗雑であった服の るのがややよいと思われました。 を表わしたいのでしょうが、そこ す。2の句妻も気にとめずで老妻 待って居り 次に本当のしわでなく、し しまい 1の句は報告にすぎぬと思いま 抱擁の劇しさ服に 気にとめず わを追う わくちゃ のまま海水着を b しわ残 いっこう 寄せが H 八九寸 S S わ寄

いうのがこの句の焦点になって居 ではありますが、席空いたままと 新聞記事をそのままの見出しだけ

のように感じられました。7の句

年末に 不景気のしわ寄せ負うた気 T ずに作句されたのがよかったと言 因であろうと思われます。気どら が出来ません。最後の句の佳さ せんが、この句も共感を呼ぶこと 句とは言えないようです。8の句 ますが、上辷りして共感をよぶ作 は大へん深刻そうに詠んで居られ は、具体的なものをはっきり句に もそうした農家もあるかも知れす

ります、4の句は少し稚拙な表現

ち話ですと失礼きわまることにな

7 合理化のし 6 暴落のし となり わ寄せ首つり記事 わよせひしと身

8 しわよせにされて百 に迫る 口姓陽に S S

ていると言えないようです。6は を第三者に理解させる深さを持っ と反対に、しわ寄せ負うて少し借 者でなければ理解出来ない曲り角 り、とでもするでしょう。5の句 句をそこねています。私なら作者 感じになって居ります。2の句の は可もなく不可もなくですが、医 のですが、しわ寄せ負うた気へが ません。4の句の作意はよく判る だけでは句を構成することが出来 かが句の上に表現されて居りませ いずれこちらと何を得っているの かんで居られますが皆が強すぎた 9 しわよせの膳とは ん。3の句はその通りですがそれ 1の句の仲人はよいところをつ 知らぬ食

えましょう。 叱られて答案のしわのばし 答案のしわをのばして母に

想像させるのがよいと思われま ような字句よりも吐られてで母を 前の句の母に見せという無駄な 美由起

ようです。 つくというところで救われている 報告にすぎない句ですがシミも 戦前の免状シワもショもつ

景がよく出ています。 着想が面白いと思いました、状 横綱の仕切り波うつ腹のし

のがよかったと思います。 の顔 蜜柑の皮のしわを見つけられた カメラよししわよしで特選 って買い しわのある蜜柑を祖母がよ 史

米川とよく似た着想を思い出しま にッすすけたハガキ旧友に用が出 ポートレートがよいと思いまし があり 二句共いい着想です、 美顔術のば いい句でありますが、私の旧作 深いしわ ポートレート わくちゃの名刺探して用 個 性とらえた 後の句の 初 盛

せるのが弱点です。

に見えるように詠まれています。 日曜表具屋さんの仕事ぶりが目 雄 水とより 鏡 初 市 老優のしわまで見える 双眼

にうかばせる句です。 歌舞伎の舞台をほうふつと眼 保育器のしわだらけの子よ

部

岩

崎

11.

夫

探草總森町

徒

みけんじ 肥満型し 折りたたみ折目 見くらべて 我子なり 台風で米に艶なくし しわの中に昔の綺麗さが残 にかかり 笑うたらし わ厭なところが父 わのな 日の わがふえると又 いのが又自 丸 揃わぬまま 0 しわがあ しわ気 繁太郎 八九十 句念坊 美由起

ころを持っているようです。 う一度考えてみたいと思われると 次回 三月号の予定 研究題「屋根 一月二十日

白い句でありますが作者と共にも

それぞれに何かを持っている面

JII

4

西野山

平.

井

絵

If.

柳

到于奥

11

林

雑

竹

松

九

角

山科西野山

誌

 \mathbb{H}

+

鳥

雀

社

京

相国寺北門府

田

HI.

Ŧ

潮

都

管屋町大宮西人

大久保和三

郎

支

相採町

大

鶴

喜

由

の句は少しわざとらしさを感じさ るのがよいと思われます、 美額術の句はうがちを持ってい

春

謹 室町寺ノ内上ル 智 # 井 1 1 F 新 F 秀 晴

芽

小山東花起 動你守 平. 本 儀 司 親 生 郎

病 院

中 島 生 Z

庵

選

病院の匂いをつけて帰っ 病院の花弱そうに咲い 病院での人気を足場に開 千羽鶴永い闘病の友 だ 病院へつく迄神へ頼 病院へ直行させる知らせ 病院でおしろい気もなく三月半 病院の個室ベッドで彼岸 病院を抜けてにぎりを二人 前 病院の残 病院は暇先 生 と 同 病院で寝たら病人らしく 病院と知らずに暮す 病院の内幕を知る 程 売店までを患者はおめか 飯犬も要 神 ŋ U 12 て来 切 T 人 趣 な 病 2 加 業 心 経 春 ŋ 0 ŋ 来 味 科 2 句念坊 大八洲 主并堂 百 静 文 鮎弘 万 古





路 集

回診のマイクへ慌てかくしもの 鉢花を隣へ残す退院 姙娠と言われ病院いやに なり 病院で見合の人に診て貰 病院スト天使も赤い旗を 病院食季節のものも匂わ 病院のベッドへ受質届けら 病院を抜けだす嘘をもうおぼえ 入院をしたが院長の顔知 ら ず 病院をかえ一縷の望み 病院に勤め家政婦とは言 病院のめし

と薬の

匂い 消盤へ病院不気味なほど 静 4 せる から 振 n H か 和三郎 野迷路 祥 初 八九寸 同 声 鶴 月 甫汀

> 病院で和漢の秘薬 健保ある気安さ病院と縁切れず 救急車来て病院の灯がと も ついて来た子は病院の門で待ち 病院へ追っかけて来た逮 捕 病院の廊下で見舞言うて 去 病院の壁の白さを冷めたが 病院の広さをはめる 見 惨状を外科の廊下はまだ 病院は癒りかけた ら楽 天 憶えて来 舞 EE. 1) ŋ 代仕男 ごん太 卯之助 同 圭 竜 好 旭 女 水 昭 整

> > 色

紙

短

册

闽

用

田田

病院で居ても待ってる給 料 病院を出て金策にとび 病院のマイクで探す快 病院で売れの買えのと株へ指示 病院で同じ病いがよくは 日の長き病院のムード持てあまし 精神科恵者殺さぬように 飼 病院へ入れて工面にかけまわり 病院で儲け選挙で 皆 は 退院ときいてご無沙汰駈けっける ずみ たき 復 [1] ŋ 十九平 宗太郎 光 藤 ー ン 十 隆 蛙 木 魚 風 波 史

病院で何だか僕も変に 病院に来て風邪だけでないと知り 病棟に口の達者な外科 病院の先輩湯たんぽ入れてやり 病院で昨日の続き読んで 待ち 患 なり 者 美由起 九呂平 淀 要 雄 紫 月 鳩

病院へ妻のことずけ子が 運 び

義

夫

病院で剃るには惜しい髭が出来

清

膩

惠二朗 美由起

退院が卒業生の額 で来 る どんたく

病院で二度目の秋の蒲団

7 を

児

避病院玄関だけの見舞

な

0 期

同

病院を出てデパートへ回 復 斗病五年病院ベッドも板につき サイレンで病院へ 行く不 倖 看護婦の冷いまでに手ぎわよし 人院の習慣窓を明

けて眠

病院の匂いもかんじぬ長患らい 病院へ来て同病の多

V

朋

病院の前へ来といて思案

面 子

丹自日堂

を南七二、七三二

田 垣 たく 方 大 代仕男 八九寸 選

面子がしぶしぶ寄附へサインする 退職も意にせず面子押し 通 友達の面子を立て た 親 不 それほどの面子か命安く 捨て 妻の愚痴面子が響く台 他人事に装い高利の門た 面子とか娘の幸福をふみにじり 大学を出たと云えない職につき ご本家がと言われ寄附金はずみすぎ あみだくじ課長は別にポンとだし 横綱の面子たもて ず 診 縄張りだ面子だ命無駄にする 大物の方の面子だけたてておき 面子などもうヘッチャラな齢になり 面子面子と母は昔が忘ら れ 断書 どんたく 孝鵜たけお むじな 淀 涼 煲 鶴 月

面子にもかかわりますと手を払い 後進へ道をゆずると云うことで 面子ってなんでんねんと釜ヶ崎 長とつく人の面子を先に うえ死の一歩手前でまだ 面 へそ繰に男の面子たすけられ なるほどと思えど面子がうないかず 刑務所のめし喰って来た一面 算盤をはじき面子にこだわらず 札束と面子天秤にかけて 見 親の面子に受験準備の子は疲れ 面子面子で自分を 忘れ 面子とやらが人の一生左右する 肩書の手前笑顔を見せら 舶来でないと面子がたたぬよう 先生の面子宿題させて 逃 釣書へ面子庶子の名は入 れ 官僚の面子が立てば判を 笥附のときだけは面子を考えす 儲け口ある日肩書邪魔にな 顔役の面子愛情ふ みに 父さんの面子へ家計簿たたきっけ 人前にてお笑い下され」古証文 | 一門の生れ面子を大事 他の面子どうしてくれるアロハシャッ (様と呼ばれる面子値切らない (様の面子 家計 子をかざして女口説き立 子あるから借着して出 簿に響 たてて じり から n てる かい 子 る ŋ ŋ け 古 7 け どんたく ひろし 恵二朗 主井堂 ひろし 卯太郎 恵二朗 弘 宗太郎 南牛史 雄 暁 史 村 遊 坐 明 古 子 i 名 子 明 子 道

見廻して丸焼を買うハイヒール 妓から見れば面子のおかしくて 面子など云ってるうちに嫁ってしまい 和三郎 同 水

等当選当ったくじが恐ろしい

草

4

大金へ母こわごわとふれてみる 大金をボスは小金の様に

愛

大金をかけたと見せぬ渋い趣味

云

結局は面子を捨てた方が 人前で食う弁当に 金を 勝 か ち H 保 夫 波

見送りに面子をたてる一 等 車 雄 4

与野党の面子国民はっと 天 か れ 十九平

面子などお捨てなさいと青い空 暁 明

大 金

木 村 + 悟 選

大金を遺してあとがもめつづけ 大金を持てば顔色まで変 大金をたしかめて見る夜の汽車 死の灰も恐れず大金抱いて居る 大金に行員 大金を拾うて震いおさまらず 土地ブーム大金百姓へころけ込み 大金をふところにして酎をのみ 大金に男盛 大金へ女矢 張り 崩 網棚にふと大金を 置 大金にふらふら意志の弱 大金を誇って夜汽車に一人読む 大金を手にしてさみし退 千円札握って幸福そうに 大金をのけぞるように拝まされ 大金の寄附無駄にせぬ免 大金持の夢を乗せてく移 馬身の差で大金をおじゃんにし りが愚弄され 自 主性 れ落 き返 失 職 税 V b 民 n 金 九呂平 同 卯之助 ひろし 月 風

> しぶちんが大金貯めて病みっつけ 持てぬ金狩って悪魔が誘い出 スカウトの眼に塵紙に似た紙 大金が貯り 左が右に 大金をふところにしてノイローゼ 大金のなきがらが飛ぶ競 百円が大金だった 世 が 大金が這入って素行乱れ 封筒に百万皮の財布に二 百 馬 な 恋 か ŋ 場 四 どんたく 句念坊 宗太郎 たけお 大八洲 同 魚

ウインクやキッスで大金しはり上げ 大金が二拍子揃った夫に 大金を持ってみんなが恐くなり 定年の夢退職金をどう使 金蔓がなければ党首にも成れず コッソリと大金裏門から這入り 大金をつかんで逃がす手相です 政界の夢大金に裏が オリンピックえらい大金いるそうな 大金が無駄な男に仕立て 後継ぎがないと大金持ち 大金を積んでも女 嫌 大金を持たせば息子たよりない 財産の保護宝石を買 大金の威力頑固の骨を按 大金を落した夢にうなされ 大金の二字 無雑作に大金入れた紙 坪万に売れて農家は寝つかれず 金持がきたなく見えて貧に馴れ いれつはつちぐらいと大金ねじ込まれ 縁談を即 と云 あ 悩 あ 決 集 5 3 3 袋 紫 三角坊 美由起 南牛史 野継路 竜 旭 八九十 生. 代仕男 季 版 坐 刨 風 14 明 児

> 大金をこんな子供に持たせて来 大金を持てば人相も変ってき 静 尚 水 史

百万円当った夢を 大事が 大金と云うのは赤字の方のこと 大金がこんなに運命変えていき 大金が有る夜の屋根を歩 く 猫 大金が出来て世間へ義理を欠き 深呼吸して百万円かぞえ たり 大金を持って寝床の位置も変え ŋ 和三郎 みのる 凹 名 lli

補償費がたんまり服も派手になり

主井堂

地

大金も忘れるほどの度胸 大金へ流し眼くれただけで立ち あ b # 鵜 汀

血走った目で大金 を 弄 15





句 会と川 柳 基

法

直 原 七 面

うでありますが、その主眼とする し実のある、いわば真実味にあふ んだ現在の例会や大会を、いま少 ところは、遊びの要素を多分に含 され種々検討が加えられているよ 近盛んに柳人間で論議が繰り返え の持ち方やその功罪について、最 現在行なわれている例会と大会 うであります。 あっさり句会の幕を閉じているよ はまた来月』といって、折角月に 一度の集会でありながら、いとも

あります。 鮮味にあふれた行事もないようで な出来ごともなければ目新しい新 何一つ参会者の興味をそそるよう 従って皆んなは、句会に後髪を そしてそこには、これといって

引かれつつも燃え切れぬ心を胸に であります。 抱いて淋しく帰路についている訳

のを完全に除去してしまって、も 即ち例会大会から娯楽性というも いうことのようであります。 れた例会大会に持って行きたいと

っと学問的な研究、研さんの場に

したいということであります。

ようであります。 中では、句会の運営方法につい せているところをみますと、心の と、あきれもし驚き入りもしてい をみて、『よくもまあ飽きもせ て、多少の不満は持っていながら 人がまた今月も喜び勇んで姿を見 るのでありますが、先月も来た柳 毎月顔をのぞけるのだなあー。 す、こんな無味乾燥な句会に毎月 実は私は、こうした句会の状態 句会を見捨て切ってはいない

うと同時に、その成果に対して、

の出来る好もしい現象であると思

大きな希望を寄せるものでありま

姿勢は川柳発展のために、誠に喜

私はこうした柳人達の前向きの

ぶべきことであり、期待すること

会の持ち方が、果して川柳のため だが、こうした沈滞極りない句

発表などが行なわれれば、句会に

物足りなさや未練を持つ人々にと

に見受けられます。

けている指導者も中にはあるよう の場など持たぬように、常々心掛 を考えて、あえてそういった論争

動向などについて、意見の交換な

どが出来たり、各人各人の研究の

たれたり、意欲ある作品や柳界の

ことになるなどと、つまらぬこと

れはとんでもない

もなく、ただぼそぼそっと披講を

採点係が採点表を集計して、

じように選をし、句評一つするで て、いつも同じ顔ぶれの選者が同 全く十年一日の如くでありまし る例会の如きにいたりましては、 は別といたしまして、地方におけ

さて、中央における例会、大会

と、次の例会の兼題を決め、"で その日のベストテンを発表する Ш 関の山で、その他は何一つしゃべ ければ自分の雅号を呼唱するのが 分の者は、たまたま自分の句が按 の多いところであると思うのであ そしてまた、句会出席者の大部

それだからといっ 淋しく帰路につい とさえもしないで て不平を洩らすこ であります。が、 えられもしないの くともそのしゃべる機会が全然与 るでもたく、否、実はしゃべりた ている訳でありま

る真の姿であり、 ありますが、これ き宿命のようでも ぬ句会の背負うべ 良き指導者を持た あります。 が地方句会におけ そこで、 悲しいことでは

でも、お互の間に 披講後僅かの時間 自由討論の場が持 スマートで着心地良い DEM

> 平という人が多いらしく、そうい の中には、討論や議論などは真っ のでありますが、どうしたもの っても、多少なりとも敷いとなる か、指導者と呼ばれる句会運営者 人は誠に少い数のようでありま った研究的な好機会に恵まれる柳

な点については、これは誠に疑問 しているのかどうかといったよう た彼らの句力がこれで果して上昇 に喜ぶべきことたのかどうか、ま

の柳人達のように、充分川柳につ めに費す時間が余りにも多く、他 は、句報の編集や句会の運営のた 思いまするのに、指導者の中に いて研究する時間

約店 有 各 地特 12 などして、他の優 前でつまらぬ論争 ず、もし皆んなの 機会にも恵まれ もなければ、新し れた柳人達から言 い知識を導入する い込められるよう

そういったことが 原因して、もしも ら、指導者として でもなっては、こ れるようなことに 指導者としての地 の顔にもかかわる なことでもあった 位を他の者に奪わ し、面目もつぶれ

川柳雑誌社ハワイ支部

百 可 南海電気鉄道株式会社

部 0

電話高槻ⓒ一 大阪府泉北郡忠岡町 林 昌 男 北五〇六

とうかというような人々は、

いま

哀悼の意を云する。 された。享年七十四才、

となり、川柳探求の道と化するな て来て、より高度な人間陶冶の場 行かないが、これがもっと大人び ものとして全面的に認める訳には の例会や大会を川柳発展のための

お気に召しているようでありま ってこいと思っている人々にとっ やったり、川柳を暇つぶしにはも ては、こうした句会の雰囲気も、 ありますが、娯楽一本槍で川柳を 頽廃的な空気に包まれているので 一般にどことも活気がなく、一種 が原因して、とにかく地方句会は 一向苦にもならないらしく、結構 従って、そういった色々のこと

あります。 しまった人もたまにはあるようで がら、川柳界から遠く姿を消して を見せなくなり、遂には不本意な は従いては行けず、段々句会に顔 ては、こうした句会はに物足りな ようなどと思っている人々にとっ 欲を持ち、川柳を深く研究してみ が、しかし、少しでも川柳に意 とても娯楽一本槍の人などに 不ゆ快極まりない集りであっ 牛耳られるようなことがあったと したらもう川柳はお終いだと私は

であります。 きな、ことあれ主義者が多いよう ば、川柳自体は第二義的であっ な人々の中には、どちらかといえ て、とにかくお祭り騒ぎの大変好 いったような、いわゆる出席熱心 も、探し探ししてでも参会すると し、大会があればどこどこまで その反面、例会には必ず顔を出 一方日本の川柳界を背負って立

真珠洞・速水晋次郎氏は宿駒の

速水真珠洞

逝

<

こには川柳もなければ文学もあっ 願わず、川柳は楽しみさえすれば むことを知らぬ人々の手によっ たものではありません。 ち入ってしまったのでは、もうそ だなどというような甘い考えにお それで良いんだ、否、それが全て、 を怠ったり、その発展進歩を乞い と思うのであります。 え方もまた誠に道理のあるところ て、この日本の川柳界が、もしも について、少しでも研究すること うと思っているようであります。 を挙げて讃成し、喜んで出席しよ らば、例会大会大いに結構と双手 また川柳についてなに一つ苦し なぜなら、もしも私達が、川柳 そこで私は、これらの人々の考

思りのであります。 このように考えて参りますと、

> れる柳人が幾人いられることであ という結果になる訳であります。 くその発展を大いに阻害している ない以上、川柳発展のためではな 営方法は、これが早急に改善され 地方におけるいまの例会大会の運 果してこのことに気付いていら

りましょう。

思えば誠に淋しい限りでありま

選をして

と真実と、大金も持つ権利はある 金、どうも世の中はおもしろいも 序の選者に初めて頂いた題が大 んです。百も大金、億も大金、夢 大金にはてんと縁のない男、 新

> けど、持った事がないが、だいぶ 重たかろう。

> > 謹

賀

新

春

に聞いたことがある。 倍野支部の句会の帰りに豆秋さん ずっと前、 旭町のうどん屋で阿

高

峰

柳

児

長野県須坂市太子町

思い出す。 んがでける、僕のあの句もはんま もんだっせ」と笑うたはったのを 嘘のない事を句にしたらええも

町三ノ一五

Ш

光

うまいナー。 腹ぐあい悪し大金持たされ

のとつくづく感じたことでした。 たものですが、選もまた苦しいも 通り生命がけで「大金」の選をし へ行って家の雑務とはなれ、文字 柳のように句笺へ清記して、田舎 すんで二、三日は頭がボーとして しまいました。句を全部、大万川 がけでやらせていただいた。選が もないので、「大金」の選は生命 大金なんて預った事も持った事

木村十悟

仕事で知られていた。 られ、川柳以外に、文化関係の郷 土歴史研究会や博多演劇くらぶの 人格高潔、弘く趣味に没頭せ

株式会社の会長として業界に重き を業とされていたが後年九州衣料 午前七時四十分、薬石効なく長逝 められていたが、遂に十二月六日 ため各地の温泉に遊び療養につと 氏は福岡市の産、洋品雑貨卸商 髄しんで のである。その時、大神梨雨江は来 稿を蒐集して単行本を刊行したも 時には川柳街道社同人(旧松雑子 阪して本社を訪い麻生路郎主幹に の東奔西走し、全国川柳人から原 品を遺している。氏の還暦祝いの 吟社)の大神梨雨江氏が文字通り 染め、柳界古老の一人で多くの作 氏は大正五年頃から川柳に手を

のことではあり、梨江雨氏の熱意 より早くより交友のある真珠洞氏 原稿を需められたものである。元

交は三十幾年の長きにわたってい そして真珠洞氏と路郎主幹との柳

行の壮挙を祝されたのであった。



に直ちに「久良伎と剣花坊」と題 た随筆を贈って、随筆と句の単

通局川柳

福藤橋山藤梅米岡草児浜冨北 村虫島深島畑岡川 一の孤幹呂胡淡春 則泉巣万々洛字舟舛志蝶舟巣

たえられている。現在、川柳雑誌 多数の川柳人によって の句碑が建てられ、氏の偉業がた げんこつ吟社育ての親として、福 尚市東油山の中腹に、九州各地の ゆるされた水が水車の下で澄 昭和三十三年十月三日には川柳

社川柳不朽洞会の洞友。

の上、多数の御出席をお願いす を送られるよう柳友御添い合わせ 歩を新しい会場で作句三昧の一刻 後六時から千日前電停前、 ▼本社新春句会は十三日 の新会場で開催する。新年の第一 会(大阪市)忘年句会は十二月十 句会は十二月二十二日 時半から難波親和クラブで開催さ 阪市)は十二月二十一日(木) された。▼南海電鉄川柳句会(大 ケーブル宝山寺駅生駒花壇で開催 は十九日(火)午後四時から生駒 た。▼大阪逓信病院忘年川柳句会 防町料亭蝶六で賑やかに開催され リクリエーション川柳句会は十一 五時半から黒田国光堂で開催。以 れた。▼コクヨ川柳会(大阪市) 上路郎主幹出席。▼国鉄姫路地区 H ▼南区医師会文化部杏林川柳 (火) 午後七時から御堂筋制 (金) 午後 土生 自安寺 六

倶楽部で開催。▼ねぶた新年句会 門。屑。雲。聟。笛。灯。泥。宿 大会は七日 は三日(水)正午から青森市新町 糊・卵・鶴・灰・湯・罪・力・庭 催第十二回新年交歓三十六題川柳 各題二句。▼柳都川柳社新年句会 •損•油•毒•醬•頭•林、 •鯛•親•朝•葱•虎•塩•簸• 兼題、字・指・歯・樽・針・坂・ 島市西新町「光道会館」で開催、 ・柿源」で開催。▼広島川柳会主 (新津市) は一月三日 (水) 正午 (日) 午前十時から広

六時から東区今橋二丁目大阪美術 知事杯争奪北海道川柳大会は一月 幌川柳社創立記念昭和三十七年度 仙台市東八番丁一七〇川柳宮城野 各題二句、投句は一月十日までに 番丁角建設会館で開催、兼題、そ 川柳大会(仙台市) ぶへび・研究雑詠。 加藤芳泉居で開催、兼題、夢・や 十四日(日)午後六時から西城山 ▼三重川柳会(津市) 一月句会は 四条西一丁目国鉄中央寮で開催。 二十一日(日)正午から札幌市北 わそわ・虎・一一〇番・駅前・おでん (日) 午前十時から外記丁通り北 ▼宮城野新春 は一月十四日

えられた由。

(日) 午前 り」▼板倉天悟空氏(大阪市)は 田狸連氏の店も覗かれた由。 温泉に遊ばれ、松山城を見学、 十一月十八日、十九日の両日道後 れた。▼弘津柳慶氏(柳井市)は れている。▼新岡回天子氏(唐津 自宅療養の傍ら川柳作句に精進さ 九月羽曳野病院を退院されたが、 いるのが不思議だとまで憂慮さ と別な気持を抱いて温泉につか 履いているのかいないのか分らぬ 貰にまで回復された。だが、右手 とのこと。御自愛をお祈り申し上 は利かず右足先がしびれて下駄を れたが、現在は血比百六十、十四 体驅が十一貫に迄痩せ、 は最高血圧二百三十、

賀

消

月二十六日から金沢へ出張、 ▼若本多久志氏 事業に専心しておられるが、社業 関市)は日夜防長観光旅行協会の 行く秋の北陸路でそぞろ詩情を覚 となれる見通しもついたとのこと 海外にも進出できる旅行斡旋業者 も軌道に乗り二、三年のうちには 尾馬奮氏(三戸市)は去る十一月 の顔見せ興行を観賞された。▼松 で京都へ出掛け、三日、都ホテル 御同慶申し上げる。▼戸倉普天氏 三日第三回青森県文化賞を授賞さ で結婚の媒酌人を務め、五日南座 (兵庫県)は十二月一日夫妻同伴 か思うよう」▼国弘半休氏 「鏡花の碑へ落葉も (西宮市) は十

(日) 午前十時から国 用来养物中

本社忘年川柳大会の余典 「大池絵」新口村、太田良子医博の忠は衛・麻生成乃女史の梅川 (十二月十日) 写真説明

鉄姫路会館ホールで開催。▼平安

川柳社新年句会(京都市)は一月

(月)午後五時から寺町通仏

柳文学正月句会は十日(水) 光寺上ル東側透玄寺で開催。▼川 月二十六日

観光川柳正月句会(東京都) 六ノ六六伊藤地天居で開催。▼札 四日(日)午後一時から港区芝新橋 から新津市駅前其の社で開催。▼ は十 社宛。▼第七回熊日川柳大会《熊 十時から熊日三階ホールで開催迫 本市)は十一月十九日 水郵政相の挨拶があった。

> げる。 員として毎月慰問句会に出席して は国立愛媛療養所川柳慰問団の いられる。▼山田季費氏(広島 ▼河本南牛史氏(愛媛県

富



平松繁三 深見雅 松下京一 IE. 帝 岸 \Box 雄 辰 化 楼 堂 始 JII 柳 佐 佐 外 谷 野 沢 伯 会 九紫

白

水

好

贴 平

同

生きて 十八貫

不朽洞の人々



中島 生 4 庵 医障

お若い、お若いと云われると、一寸顎を撫でて、そうで

生

施

路郎主幹、生々庵、栞、いわを、 新戎橋の「おます」で開催され、 渡布されるので、その歓送会が十 一月二十九日(水)午後七時から

る。

る由、又、郷里が砥部町なので士 氏(西宮市)は一月二十一日羽田発 慨深く読まれたと。▼若本多久志 月号の主幹の「道草(三)」を感 う一冬自重して病院生活を送られ やっぱり雨に合い」▼小浜牧人氏 眺めていられると。「山陰の旅は 騰障害のため同僚の宴会を尻目に と私用を兼ね玉造温泉で清遊、 を過された。又、十二月三日公用 会に出席赤穂御崎館で楽しい一夜 年が経ち、だいぶよい方だがも (西宮市)は舞子病院に入院して

年度第一回全国鉄川柳人連盟幹事 市)は十一月二十五日昭和三十六 梅里圭井堂の諸氏が旅の安全を祈 って乾杯された。

電話局番改正

男をもうけられ、修と命名され

お慶び申しあげる。▼速水直

(福岡市)は病気療養中の

▼平田実男氏(宇部市)は昨秋長

謹賀新年

西出一栄さん(大阪市)の局番は (七六一) 三四五三番に改正され (九三一) 二九四六番に改正。▼ 本多柳志氏(大阪市) の局番は

句碑建立

めて歩けば月も歩き出し」があ ポーツを好み、自信句に「あきら 社社会部長。趣味は川柳の他にス 後藤柳杷方。故人は生前東奥日報 事務所は青森県黒石市大字市ノ町 で目下募金中である。一口二百円 句碑建立準備委員会により計画さ ▼故小林不浪人句碑が小林不浪人 昭和三十七年九月完成の予定

0 黒 板

時から福岡市東職人町大長寺で熱

年七十四、葬儀は八日午後二 十二月六日午前七時四十分死

行された。謹悼。

移されたので、支部も同時に同所 賀市大聖寺永町一五〇番地へ居を 支部長野村味平氏が今般石川県加 へ移ることとなった。 ★川維大聖寺支部移転

☆会員諸氏へ 不 朽洞会か

> をお願いたしますと同時に一層の させていただきましたのでご諒承 題は臨時幹部会で即決主義で果た を続けてまいりましたが緊急な問 ます。常任理事会も台風以来休会 大いに力を尽したいと思って居り 活動を開始し各位のご期待にそい が改まると同時に役員会も活溌に 風交をお願いたします。本会も年 お芽出度うございます。倍旧のご こ支援を祈ります。

一生々座・多久志・梅里

謹 賀 新 春

大 坂 形 水

一ノ二大阪市東区糸屋町

6

川柳雑誌社鳥取支部

孫二人歳々お若くあらせられ

鳥 取 111 柳 会 同

腕白児寺入りの日に叱られる 唐 IE. 崎

電話(六七)〇四二大阪市住吉区帝塚山

団体旅行は

防長觀光

山口県厚狭郡山陽町厚狭 防長観光旅行協会

常務取締役 国弘 伍 一

下関市上新地町小門(9毫) 国 弘 半 休

花月亭九 里 丸

れる自画像の句である。

にも左右される。十六貫五百の全細胞が、お若くあらせら ない。お若く見えるだけの事なれば、散髪やネクタイの柄 もありやせんよとすましては見るものの、悪い気持ちでは

いのちある句を創れ



投稿規定 確▼締切毎月十五日▼投稿先▼用紙は原稿用紙▼文字は正 本社宛

本社 忘 年 句 会(大阪市)

場 大 成 閣

12 月

10

日

午後1

時

ずかしい顔が着想のやりくりに余念がな を手にすると、これは、師走の顔だ。 大成閣の大広間には笑顔がいっぱいだ。 このなごやかなムードの中で、さて句笺 本年度の本社句会のフィナーレを飾る

題吟軽視へ抵抗のことばを吐かれた。 たが、どちらかに軍配を上げねばならぬ インスタント作句の支部対抗戦では常勝 話清水白柳氏とプログラムがすすむ。 柳氏は課題吟を通して生活を詠めと、 雪月花戦では白組が優勝し、おなじく 司会黒川紫香氏、挨拶松江梅里氏、 É 柳

いといったところである。

阿茶さんと十悟氏の決戦となり、行司役 の西尾栞氏が頭をかかえる大相撲になっ 息づまる大接戦の末、阿倍野支部の木村 -悟氏が横綱となる。

さん、奈良子さんの女性軍が気を吐き、 テランの領色なからしめるなかに、阿茶 不朽洞賞杯は傍島静馬氏堂々の秀句にか 天位受賞者は新人、中堅の大活躍でペ

子のショック親は案外知らずに居 純潔へショック泣き入るばかりなり

いさむ

与呂志・柳志・旅風・紫香・葉光・/女 62年度の躍進を誓う杯がとぶ。 盛会で、岩崎愛二氏もはるばる出席され 宗·栞·客遊子·摩天郎·梅志·薫風子 正一•小松園•黒天子•清子•一栄•南 ・静馬・狂二・和三郎・す、む・竹荘・ 悟·蕗児·多久志·奈良子·春巢·清風 • 文秋 · 弦月 · 一三夫 · 阿茶 · 白渓子 · さむ・笛生・柳宏子・八郎・眉水・圭水 がやいた。閉会後の懇親宴会は空前の大 ・生々庵・古方・いわを・庸佑・良子・ • 水京 • 水客 • 愛論 • 博遊 • 東天紅 • 十 出席者一路郎・舟遊・白柳・梅里・い • 菁風 • 繁雄 • 文蝶 • 宏子 • 爱一

兼題 ショック 麻生 路 郎

幼な児のショックロパメとママけんか 娘の事故がショックで妻は世を終り 割り切ってるショックを知らぬハイティーン ショックした方めいどへ先にたち ショッキングなどと娘の大きょうな ショック気にしながら事故をつけに行き ショック死の五字が判決くるわせる いっぺんに男勝りがけしとんで 子にショック与えた母の行状記 暴落のショック株券抱いて死に 父のないショックしゃべらの子に育ち 破産かも知れぬショックの目が揺わり 患者より付添う方がショックうけ 脳病院株のショックできたマダム 振られてももともとの気がこのショック ショックからさめて居並ぶ医者の額 白渓子 柳宏子 奈良子 良 一三夫 八郎 紫 紫 水 爱 m 狂眉 否 香 子 客 巢 論 茶

> 特賞が当りふるえが止まらない 錦ちゃんが結婚娘 飯 くわ 怪我の子よりショックの母に手がかかり よろめきを見つけたショック娘が家出 ショック死にしとけと医長のつめたい眼 正直者だけがショックをきつう受け ショック死が妾宅だっただけにもめ 尻餅のショック結晶フィにする ショック死の仏の顔をはめてゆき ショック死へ先生チットモあいてない 衝突のショック出 産 予 老妻に死なれショックが酒になる 尻に敷くニュースを入れて婦人会 大地震額ごと落ちて大ショック バンバーのつもりで珠数をもちあるき 老いらくの恋が破れしショックとか 失恋のショック今にも死ぬように 注射禍でショック死又もトップ記事 ショックもう限界に来た背へ砂 ショックですなぞと抜擢うれしそう 徹な父もショックで折れ給い 算 ず 外 八九寸 与因志 句念坊 野迷路 どんたく 薫風子 静 繁太郎 照 季 清 梅 一ン十 炉 然 圃

兼題 歯 中島生々庵選

妻揚子今日から要らぬ歯にかわり 改造改造で入歯内閣出来上り べちゃくちゃと入歯が動く餅の味 総入歯とればほんとの齢になり 歯の痛みこらえてデートの若さあり 着たなりの卸へ妻の糸切 雇い歯がふえてもルージュ手放さず 歯の欠けた鋸探して貸してくれ 歯のきれい女にあっさりだまされる 阿呆らしく腕の歯形は見せられず コーラスのローせいに歯が白し 白渓子 与呂志 生清牧 照 胪 茶馬 甍 風

謹

新

春

一の一一 加伊福中岡宮麻福道平本岸石魚本吾 集院 多川倉住多郷井 竜利歌敏利活葉保清 旅満柳玲文 梅 志晃郎子然良昭男子子幸石平美人漣風潮志人蝶

JII に 雑 なり 誌 社 支 部

営業所 場 宅 大阪市南区西东町 (1000年) 大阪市南区西东八尾市八尾木六一三番 (1000年) 八尾木六一三番 (1000年) 八里市公司东町三0 (1000年) (1000年) (1000年) (1000年) (1000年)

自 I.

栞

旭

尾

目の前で轢かれるとこを見たショック

歯にしみる嘘嘘青柿の渋に似る 歯が二本裸の写真送って来 入歯まで忘れて帰る 梯子 酒 財産のうちと金歯入れてくる 歯に衣を着せてもドライ通じない 身上の八重歯をぬけとすすめられ 明眸皓歯まだ縁談がまとまらず 黙ってる母の背中へ歯がたたず はめられて入歯ですとも言いそびれ 歯一本欠けて好々爺らしくみせ もう一寸歯に衣着せりゃょい社長 歯型から身元がわれて足がつき 生々庵 どんたく 柳宏子 阿爱竹 愛 竹 一三夫 阿 栞 蕗 児 茶

兼題一目 北川 春 巢 選

特徴は目尻毛並の良さを見せ たたきつけてやりたい目尻のこびで来る 目尻から歯並と女批評され 目尻下げ公金女にうつつ なり さがってる目尻で勘定高いなり 目尻からはほえみ給う老師にて 易者言う女難の相の有る 目 目尻下げてあの妓を呼べと蒸タオル なぶってるように目尻にある嗤い 人の好さ目尻が先 に O K 悪漢にえどる目尻はつり上がり 化粧品目尻の皺へ呼びかける 目尻もう鳥の足になやま され 福相を目尻でわかるとからかわれ 見合では目尻がもっと上がってた 金を持てば目尻が 下る なり しずく目尻にためて反 抗 の字の目尻くったくない暮し トロンの目尻の下り見逃がさず 目尻の涙美しく 整 中 生々庵 多久志 進之助 奈良子 客遊子 小松園 野迷路 笛 摩天郎 進之助 文 季 光 生 秋

> 目尻だけ下げてチップを出そとせす 床柱目尻を下げて 写 される いい年で目尻を下げたからばられ 目尻下げすぎて寿司までおこらされ 目尻がこそばゆい孫の話になっていた 十二月目尻を下げるヒマもなく 器量よし目尻のしわを共にしてる 釜ヶ崎目尻のヤニがよくしゃべり 目尻さげ口から猪口を迎えに出 いらんこと言うて目尻でにらまれる 目尻まで娘になっている八重子 八卦みるには及ばない目尻なり 人の好い目尻の皺に見込まれる 文 秋 白渓子 春 一三夫 梅 どんたく 一三夫 志風 巢 方 里

悟 若本多久志選

何気なく二号の覚悟聞かされる 覚悟して黙っておれぬ口を利き 覚悟の女涙の顔 馘首覚悟していなかった使い込み 覚悟した別れ話に涙 覚悟して来た病院を軽う 出る 辞表出す覚悟言いたい事が言え 添いとげる覚悟できがす二階借り もう逢わぬ覚悟へ電話のべゃつくく 東大も落ちる覚悟で受けて見る 覚悟して来れば違った話 な り パラ強く覚悟を決めた叩きよう 三つ額を並べて覚悟ゆらぎかけ 落選も覚悟主張はまげられず 定年の覚悟を妻に励まされ 覚悟もうきまり家裁へ落ちついて 又覚悟ですかと借金断られ 落選を覚悟で見上る掲示板 卒業近し子供の覚悟たしかめる どうにでもしてよと女にある覚悟 を上げ ふく いさむ 東天紅 一夢すいむ 狂 文 紫 竹 摩天郎 野迷路 句念坊 秋 Å 香 荘 香

> 辞表書き終えて碁盤に一人座す まかせきった白さに包まれている手術 叱られる覚悟を決めたノックする 順答へ覚悟をきめて待つ 音 痴 つらいけどお別れしますと女去り おどかして変えぬ覚悟を見直され 母となる覚悟あらたに腹帯をする 引退の覚悟へ未練まだ残り 税務署へ覚悟をきめた顔ばかり 終電も見送り泊ってゆく覚悟 女ひとり生きる覚悟を胸に秘め ともに死ぬ覚悟で添うたにもう別れ もう覚悟出来ていますと別れる気 腹這いのままの覚悟は迷いぬき 覚悟してるなとも一度念押され 苦笑して初老を覚悟するメガネ 逃避行覚悟十分で きてます 覚悟した素直へ叱言しもておき 口説かれぬさきから覚悟きまって居 叱られる覚悟の椅子を浅うかけ 落ちる処へおちて女のいい覚悟 他人さんの覚悟へマイク突き出され 覚悟しろなどと割前とりにくる ト荒れを覚悟でおそいベルを押し 柳宏子 白渓子 進之助 奈良子 すべむ 進之助 白柳 奈良子 清 子 生々庵 良子 和三郎 進之助 一三夫 八竹舟阿 白水 郎荘遊

> > JII

中

警 後 藤 梅 志 選

夜警して夜なきうどんもまたたのし 年末の夜警うどんがのびている 飲める口で夜警ひきうける 新任の夜警足音高すぎる 弱そうな男と夜警組まされる 夜警してポリスの苦労わかりかり 夜警して夜の長さを意識 逃げる音夜警二三歩追うてみる 回り夜警睡気をさましに する 出 柳宏子 白 栗 与呂志 静 眉 韭 馬

謹 習 新

大鉄・天鉄局支部

正都大塚宮永吉阿保植松丸辻 村川川客杜初 口尾原万 水求秋笑笛永紅万岳 杜初溪 客女月太生断月的詩子的甫子

豐 永小竹村 Ŀ 藤池 内]|| 支 しげ ゆず いさ 1: 平を 三る香

木 西 電大阪 8七五一〇番吹田市松ヶ鼻一一三七 一六七 わ 峰 を

拍子木の音が深夜のビル 事故零の夜警を照らすあさの月 夜警から社の内幕がもれており これごわで歩く夜警の足しずか 番犬に吹えられ夜警苦笑 風邪引いていても夜警は休まれず 張り切って出たが夜警も風邪を引き 夜警当番男勝りが 女世帯夜警勘忍し 街燈を消してまわって夜 警 朝 市会議員夜警へ一本提げて来る この辺で回れ右して行く 夜 警 ことことと回る夜警に故郷の事 内緒で一ばいやって来た 夜 警 頬かむりすると夜警の顔になり 夜警ふと何かの音で立ち止まり ころころに着せてこともを出す夜 茶と菓子とだけで夜警は寒くなり 仮警すっ夫に

真綿背にお 善行のその後を夜警忘れ 成末のムードをかもす夜警の灯 雨の夜の夜警神経ビンと 強盗の記事に夜警は念を入 アバートは夫婦揃って夜警に来 回りしてから夜警炭を てもらい 一人いる する つぎ b 6 張 n n 世 進之助 すいむ 葉 いさむ 庸 一三夫 春 南 茶 宗 巣 里 香 馬 巢

題「裏切り」 Œ 本水 客

裏切りの声耳元で 小 さくし 期待かけ過ぎて子供に裏切られ 目にいれてもいたくない子に裏切られ 裏切りもあって労使はもめつでは 裏切りを嬉しく送る 独 裏切ったおんなけろりんかんとして いつの間か裏切り者にされて病み ったとちびちびのんで愚知るなり 身 奈良子 いさむ 良 清 狂 子 秋 估 子

職安の鉛

筆 男

でよむ頭 の顔に

なり

日雇いの女

日雇いの妻にくらしの詩が生まれ

裏切りに聞いば子が病み妻が病が 裏切ってバーのマダムにのし上り 裏切った歴史そもそも関 裏切った奴がズンズン出世して 裏切った方にも理屈揃う てる 裏切ったついでと浮気重ね出し 裏切りじゃないぞと席を蹴って起ち 裏切っておいてへ理屈つけている 初めから裏切る心算りの名刺出す 裏切ったようで悪いがのりかえる 裏切りもんはっとけはつとけホイ除名 落ちぶれてから裏切ったのを悔いる 丁寧な言葉で裏切ることもあり 裏切りの仲間一杯やってい 裏切りを振ってやったと言いふらし 裏切りを記びて静かにこの世去り 冷遇をしとき裏切りだけを責め 裏切りの声とは知らぬ一一○番 垣場に来てからあっさり裏切りし ケ る 原 生々庵 与呂志 柳宏子 [htt] 白渓子 進之助 与图志 梅 梅 一三夫 志 圃 柳 悟

H

席題「日層い 水谷竹 荘 選

日雇いの語り陽焼けと爪 日雇いは昔よかった事を 言う 日雇いの中にも生きていた詩情 日雇いの端ばしにある過去のこと 日雇、なしててもキリスト教に凝り 日雇いの宵越しの金持たぬ主義 日雇いは今日も日当だけ働き 日雇いはみな前歴を伏せたがり よくきけばまだ日雇いという身分 ボーナスの量を日雇いけなるがり 日雇いのシャツ洗濯のきかぬ程 隙間風日雇いの身に 雇いに寒いが晴れが続 雇いは日雇いの口へつれてゅき わ < びし 0) 朝 客遊子 摩天郎 いわを いさむ 春 狂 すいむ 南 月 巣

> 日雇いのおばはん仲間に恋があり 職安の一日日雇いの声に

あ

トラックで日雇いの群れさらわれる

紫

否

雇いに馴れて男に負け

Va

笛

生茶佑

、情に抱かれ日雇いまだやめず

コップ酒ながら日雇い満 足

一雇いの子と思かせの見栄を着せ

白溪子

小松園 一三夫

うらぶれて日雇い稼業も板につき 日雇いがあぶれた雨の職 老いの身の日雇い職に甘んじる 日雇いの汗に暮しの香がにおい 日雇いの明日の希望へ夜空見る 日雇いに清掃させて無理予算 日雇いの仕事は時間ばかり待ち 日雇いへ今日も休めと降り止ます 日雇いの焚火係も割り当 夕焼けに日雇いの父待ち詑びる 日雇いは句集を出して認められ 日雇いが四五人朝の辻で 待 ち 日雇いをしてても大きな夢をもち 時間だけきっかり日雇いまもるなり 常傭になる日を信じ今日も暮れ 休む間の焚火に日雇い女 編 日雇いのあたまをはれてポス肥る トラックに日雇い積んで来る港 一雇いの素性は問わす飲み仲間 雇いはどこへ行くのか空は晴れ 雇いの今日も日当飲んで去に 雇いの遠慮が座布団にはふれず 一屋いをしてても詩を書き歌をよみ 雇いの基地はと聞けば釜ヶ崎 安 7 10 進之助 白溪子 奈良子 小松園 与呂志 紫 梅 いさむ 狂 静 笛 阿 庸 1 梅 葉 庸 Ш. 111

H H H

FEATHER

日雇いになって再起のトロを押し 雪月花句戦 親馬鹿 菊沢小松 付 圍 #

先生へ苦情持ちこむ親の 馬 鹿 先生の言を親馬鹿 信 じ 親馬鹿が子供相手のバット振る 兄弟の知恵に親馬鹿利用 歳を連れて振りかえる人の眼を感じ 親ひとり子ひとり別居さしてやり 親馬鹿を子は勿体なくもけむたがり 親馬鹿が買うて戻ったガンブーム 親馬鹿の弱味をついて儲けられ 親馬鹿の見本にされてうれしがり 狼を賞めてくれた八百屋をひいきにし 親馬鹿は親の方からよりもどし 親馬鹿と子ども薄々知っており 七五三親馬鹿とうしふりかえり な 3 れ 進之助 白溪子 与呂志 すいむ 栄 巢 生 43

お袋と呼ぶ子あるのにまだ迷い

何も考えたくない音楽でも聴こう 実印は昔を語る馬鹿で バッハ聴く間も雑念の絶ゆるなし ロ短調ミサ聴いてからの 踊らればならぬ笛の音を知るコプラ

か

3

すい

志 to

川雑

玉造支部句会

(大阪市

出

栄

報

預った大金お尻がモゾモ

守 E

信

川維 淀川 支部句会(大阪市

木村水洞

重没になる頃会社つぶれ 楽しんで待ってた鍋へ空のびく 真っ四角に座ってゃりが悲しい日 大物はヤクザながらも名士なり 熱帯魚のようにヤクザ街を行き 大臣の樒ャクザの 親の見栄有名校の 門 金 15 * か 立 1% け to 三十郎 六竜子 花 生 東洋男 水 司 洞

にしなり支部句会

(大阪市)

後藤梅志選

川維 阿倍野支部 句会

発車ベル未練たち切るように鳴り 貸した金区切りつけずに逝てしまい ベースアップ獲得感想はくたびれた 感想も大物うかとしゃべれない 煙突を淋しく仰ぐ長期 返事だけして区切りまで読んでいる 丸髷ではっきり区切りつけたもの 律義さは預りものに封を 預りの包みを子供あけたが 預って仕舞い忘れて騒ぐ 金井文秋 2 す te (大阪市 る ŋ 1) 風仙洞 柳宏子 喜久堂 文 井 清 372 草

鼻っぱし買われてストの委員長 みな敵に廻してしもた鼻っ 喋り続けてその内幕にふれきせす 内幕をうすうす感じている社員 内幕をばらし週刊誌をか 名案の浮かばぬ儘に着く我が家 名案どころか温泉ぼけして戻り 皆様お知恵借りま 沈黙を破る名案 だし抜けに訪うて円満見届ける だし抜けに会社へ電話かけて来る 十二月 だし抜けの呼びだしギョッとさせ だし抜けに狂女の笑う恐ろしさ 悪友が貯めるプランをつぶしに来 子の夢をどうしてやぶろ十二月 十二月隣りはそんな顔も 四円の年質買いそこね す 更 投 12 ざり 書 な せ 柱 す 文 小松園 圭井堂 庸 静 良 Œ 馬 福 楽 file 子 京 光 里

趣

味

圃

柿の皮たれ子無き夫婦の相黙す

ベートーベンが飛出してくるクラシック

生:

藍 平. 陳列を覗けば靴屋

を見 が

然

眼の黒いあいだは実印渡されず 化けそうに破れてちょうちんやみの中

0

湜 灯消

え

82

村

祭

昭

慎 竜

太郎

有

駄のなさ時候見

舞

P 0)

R 旅 7 3 話

#

3

弗

周

友

は 3 1

病 暑

来 L

万里步 平八郎

8ミリへ秋本番の

柿 靴

熟

n る

六竜子 葉

> お見舞は明るい話し 慰めてくれる言葉に又ホ お見舞に来て裏話聞かさ 見舞ってはくれなとやはり人を待ち 義理で来た見舞は昨日退 筆不精暑中の見舞だけを 書き お見舞の英語の本をもてあまし 重役のお見舞うけたあと 疲 台風に見舞われ案山子のいらぬ秋 T 帰 院 1.7 れ 1) ij 3 笑

> > 痒

長

カロ女

水

恵津子 泉

柳

川維 ワイ支部句会

ゆるんでるネジかものうく鳴る時計 鼻っ柱つよ過ぎいつも孤独なり 鼻っ柱折られた宵 0 岩 風 一三夫

> お見舞の花と微笑 見舞金贈る社長の眼のう

to

友

の

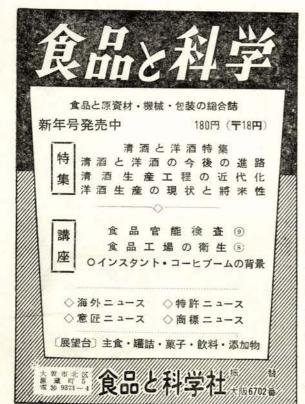
L

見 見

舞 舞 0 る

略 溪 屋

築山快夢 (ハワイ) 須磨子 エス子 多起報 緑 呆 細 仙洞 茶 太 潮 星 児 観光で見舞をかね 常夏へ暑中見舞も お見舞も痛 てれくさき癒った後から見舞うけ 用意した見舞の言葉云いそびれ お見舞の花一杯に 義理でゆく見舞花束派手に持ち 客の帰り待ってる子等は見舞品 故郷の水害見舞魚ぐ 公然と見舞ってやれぬ義理の仲 秋の夜の虫の音悲 花屋から届く電話 L



恋人の見舞は先に お見舞にゆけば鶴亀謡っ 手 を とり 握 ŋ 快夢起 あき坊

> コスモスの倒れたまんま花ざかり 逝く秋を惜しみ今宵の交 換

美 光

会

花

川雑 京都支部句会 (京都市)

女の瞳がね 田 12 中鳥 み 雀 絵 選 川雑

モデルの自信画伯の腕がもの足らず

つる子

デル地区っまり税金待ったなし

東

モデルへ女

文字通り蛸伸び切っ て 秤 モデル今日まぶしょ人の瞳を感じ

竿

たわむれに蛸の吸盤未だ生きる

弓削支部句会 (岡山県

怒られて猫ふにおちぬ顔で逃げ

雄 郎 代 江

し母に再婚

決りそう

中毒が恐わくサシュに手をつけず 十年一昔こうも貧富が逆 謎めいたメモへ刑事が走らされ 台風が去って天気図振り向かず 月の色も薄れて恋も遠ざ か 先輩が次々病んで滅入ら

さ 御先祖の墓石を踏んで蟬を追い すき焼ですます小さな祝 すき焼きは下戸が上手に味っをけ も廻る扇 転 こと 風 直原七面山選 ŋ n 機 仙人坊 知恵美 册 甫

死の灰降る地球のここに蛸焼屋

祭り月大阪

は蛸京

は

£

お一人ですかと飲み屋のおやじいう

誰も居ない灰色の雑音こだます

ひとりでは頼りのおますと恋になり

ひろ子 路

郎

妻のメモ帰宅時間が書いてあり 料理本のとおり夕食出来 上 り 破り去るメモに秘密が書いてあり 待呆け食った逢瀬で風邪を引き パパのするすき焼のぐの大きすぎ お料理のメモ帳もって嫁入りし すき焼きの度に家計簿足を出し 音楽会くしゃみをこっと噛み殺し すき焼を囲み吾が子と語 る すき焼で汗をかきかがピール 陰口をしているらしいくしゃるが出 すき焼が待ってるパパの給料日 すき焼を煮詰らせてる長 談 幸 義 三四郎 みつ江 さゆり 三太郎 しおり すみ子 とよ子 賢 童 郎

母としての溜息を子に見つめられ

紅

寿

溜息に男一

匹

か

と乗

0

喜

由

川雑

大聖寺

支部句会

(加賀市

溜息の妻家計簿を音 溜息へ石段高くの 溜息の掌中にしか 青春は暗しナイフと怪は あをむけになって一人の空を見る

0

閉 かっ

和三郎 薫風子 と宝くじ

光

居

10

砂

耐

L

か

ŋ

溜息の硝子の向う 師

走

ts

ŋ t

男

余暇時代旅行プランを今日も練り 秋

子

備前支部例 会 (M

月明り素質のままで来たを悔 月と僕だけが起きてた孤独の夜 秋の月ちょっとそこまで出て見たし お月様こんなお芋が出来ました 昼の月見たいに老のうら 独り行く夜道を月がついて来る 病床で見る満月の 病床で名月までの 指 を 内職の小窓へ丸い月が 張り込みへ月が少し邪魔になり 終列車の出るのが惜しい月明り 月ほめだんごの味をほめ 丸 Vs 他 档 30 忘 ~ to ŋ 声 伊久野 あやめ 博 秋 宗 東 賤 声

失恋の俺には月がまぶし 気にかかる隣りの後家の生活費 良いパパが娘の理想像と 方言の相手見つけ 満月へ母は両手を 進引に月の お月見に猫も仲間に入れてやり よちよちと隣りの孫が無言で来 光 かる 7 合 眀 2 L 旅 す T す ts 100 0 E 八千代 良 様 胡 竜 A.

川雑 篠山支部句会 (兵庫県)

思い切れをせずあの娘一人に苦労する 恋愛が次々 苦労身について豊かな芸を生み 書 労 0 種 酒井ひか平報 宿 孝 多津男 風

横丁でサヨナラだけがよくきえ

羊

野

村味平

選

交換をした鉢植が惜しく 横丁から花嫁が出る人だ

ts

ŋ ŋ

味

SE 城

か

雅 醉

山市

台水部 四 衆 部

⊗ 0567 • 0568

苦労した父へ新居が間に合わず 精魂の稻穂流 インスタント苦労したのがあほらしい ボンボンの苦労女の事ば はした株一人前の 株価落ち短い短いたばこ ケネディが何やら云った、株動揺 苦労した日当パチンコに 親切で早() 一貫作業 L THE PERSON OF P た水

川雑 米子支部句会(米子市

五〇〇株で夫婦の紐ののびもちみ

を

古 喫

100

みのろ

供

元

左文字 ひか平 僧

3

万

か

1)

¥

小西 雄 K

選

ユーモアな柳話ひとしまたっかしく 億大なる足跡残して君は 雲足の速さ美笑忌たそが 三鴨美笑追悼句会 逝 n 30 る 蛙眠子 節 福 to

45

母子寮にともるいこいの灯も薄く ほんとうの味方がほしい未亡人 夫逝ってからは素顔の未 亡 人 勤め先子には内緒 遺児すでに家計を背負う年となり 未亡人通して嬉しい子が 溥化粧今日つつましき未 えり足に若さかくせぬ未 末亡人季節の花もそなえ て 未亡人四十の恋をもてあ びり駈ける坊やの足は親ゆずり 保育園額は母さん見 最後まで頑張り抜いて湧く拍手 子供より親が張り切る運 運動会親子リレーのなごやかさ 倒れそうに元村長も走らさ 炭入れに来て密談のちょっと止み ばあちゃんの炊事消炭よう貯める 景勝の地炭焼 炭を焼く家も電化の進み 宿題へ祖父がサービス炭をつぐ は 0 未 人占 T 博 Ľ t Ľ から 踊 動 It n 会 ŋ 愛 懸 幸 俊 曲 Œ. 喜 砂 醉 鯨 厳 一郎 闡 月 楽 Fr. 知 合 道

川雑 高知支部句会

大西迷窓報

挿木した君の柳のしげり よ 句集にははつきりきざむ亡き名前 川やなぎ手入れとどいた茂り様 三鴨美笑松露の始祖としてたたえ 験にはまだはっきりと残 会長のこの座にありし日を思い る 顏 5 車楽斉 素 吾 雄 H 机

(高知市 世渡りの術も覚えた 未亡人心 未亡人何時か煙草の味を 未亡人女で すわと

杏

林

JII

柳

会

(大阪市

0

誓

٤

4

5

迷

密 理 未

亡 知

白タクとなじみになった深夜族 村八分みたい白タクひそと待ち

休日の白タク子等とドライヴー

幸

男

用件が二の

次

K

なる

女

客

気がもめる向いのやもめに女客

ŋ 夜

薄

化

粧

遊

南 海電鉄川柳会 (大阪市)

賞 うた花 名 中島生々庵報 Ш 野迷路 五十六 珊枝郎 生々庵 瑞 11

なぐさめてくれる信号灯で待ち

宇 荷 圃

南 水

专

美

L

5 1

信号灯その足もとに 脳底骨折ああ信号は青で 叱られた信号灯の

非

L 常

た

仙洞

リパイパルプームいつのまにやらより戻し

かわいい瞳ストラッパーと思えぬ娘

凡

並

永

松

東

岸

信号灯出世した子に手を引かれ 現ナマに物を云わせてのし上り 現ナマに弱い代議 士 頭 現金の出入りはげしい給

縁

腰弁 挨拶

0

昔

を思う

月

F 料

げ 日

まさる

履物を揃えて 玄人と

あ

から

る

柳

6

う香

水の

きはち

1

心

Ł

别

な 社

> 客 客 客

六竜子

地ら

h

花 蓝 兒 徳

弁当と徽章渡してこびを 弁当に今日の無事故を祈

売 る 長 女 女 女

ŋ 日

摩天郎

問

パチンコで雨やどりしてすってんてん こんな柄あったかいなと衣更え 衣更えスカートの腰振ってみる 衣更え去年 出よけの香いその***着て出かけ 涼しさへ着せるに困る子 沢 雨やどりカメラねらさぬ身の構え 雨やどりついでにじろり偵察し

コクヨ川柳会

肉体で勝負しますとマダム云い

よしを 愛

萎びたる肉体にし

て売

残

ŋ

肉体をはった舞台と気がつかず

草 春

肉体に先ず六十を 肉体美自慢のモデルよく 信号灯みせて子守の故郷 恋の瞳に信号灯

教

え

6

九

雄 驻

稼 想

竹 宏

(大阪市

す

韭

水

宏

子 置

その中にほこりもつけず裸随筆 葬儀屋のコイシャッだけが汚れてい 村長のワイシャツ糊が利いとらす ワイシャツを携くりいかにも働き手 稼ぎ高誇る男のケ 富 柳 会 句 + < (富田林市) 20 3 理 理 留 はたる 角 柳 休 報 波 i

市になって今年も菜種花ざかり

合併は木に竹継いだ型に 合併で職去る人の

ts 60

ŋ 姿

句念坊 みなつき 台併に待ってたポスト又とられ 苦肉の合併相談役に祭られ 貸した星強い関取気にとめ 売れっ子へ立替えのきく社用族

老

合併を して 急行の

停まる

街

路

合併で

通勤遠く なった

だ

H

通信 病院川 柳会(大阪市)

大阪

橋本幸男報

会

齢のこと言わんときまよ女 阿部柳 客 太報

協

賀 新 春。

H 西 福満區山県和気郡吉永町 TEL器〇五九〇 垣 111 方 晃

大

味 酌 よ 2 U

里 上の店 U TELの〇一四七 〇裏

梅

締兼切題 投句表 • ★大万川柳(第百三十一回)を募る 大万川柳会宛阿倍野区松崎町三ノ10 月月輪廿五日 路則先生選 (店內揭示) 五句以内

•

自三十一番地 自三十一番地

TEL圖二七一

室 柳

自身大いに作句に精進する覚悟で

この言葉を汚さないためにも、私

生

郎 路

た。 を揮われたのでいい読み物となっ も云えると思う。それぞれに雄筆 訳だが、それだけにむずかしいと 句だから思うままに書けるという ので編集局一同感謝している。 読みごたえのあるページが出来た ★寄稿家諸氏に新年特集として、 自句自釈」をお願いしたが、

★米ソがゴタゴタ云いながらも原

目出度い春を迎えた。このゴタゴ 爆は落さなかったので、お互いに

7 1)であるからお含みを願いた かい た。 が全部3ケタに変わることとなっ ★では、 ★二月四日から大阪の電話の局番 従って我が社の局番も 電話番号は従来通り(608 が(671)に変更される お互いの健吟を祝して乾

研ぎたいものだ。

から大いに咆哮してお互いの技を はあるまい。本年はトラ年である 界の寵児となることに専念する外

かしておいて、私たちは芸術の世 方面のカケヒキは政治屋さんに任 タはまだまだ続くだろうが、その

川柳雑誌社主催

新

春

を尽したい念願である。

★それにつけても、郵便物の遅配

って短詩界のために微力のかぎり

★その意味から私も駑馬にムチ打

~ ンの散歩

る。みんなして郵政大臣の尻を大 は私たちにとって死活問題であ

いに叩く必要がある。

★世界がだんだん縮ってゆくので

なって、ことしも柳道の先頭に立 必要だ。春巣編集局長以下一丸と のみ。それにはチーム・ワークが いかなくとも、とにかく前進ある ▼明けましておめでとうござい ▼猛虎の破竹の勢いーとまでは、

らずに、人口を少し減らすことが やって行きたいものだ。戦争によ その点は川柳によって、朗らかに 人間がだんだんコセつくようだ。

必要かも知れない。

さむものはいない筈だ。光輝ある ★私が「いのちある句を創れ」と 各作家もこの言葉に異議をさしは 提唱してから既に久しい。全国の 0 • 謹 賀 新 春 •

沢 田 几 郎 作

電話の二九一三大阪市西成区玉出

で酔っぱらい、フロ屋で倒れるよ もう。ボクも負けずにガンバルつ かたちで若さがあふれてくるとお もりでいる。しかしカス汁をのん は、これからの誌上に、なにかの ▼元気者の西田柳宏子氏の加

小児科· 沢田 医院

が本年もよろしく。 うじゃ、このトラ、口はどもない (二三夫)

か・料金・ガサツ・親味、所、

・7日(日)一時、題、トラ・静

新春句会一川維支部

題、

米子市公会堂和室、 年玉・だし抜け・レジャー、所、 子句会・15日(火)一時、題、お とらの子・あいさつ・不意、 所、難波高架下親和クラブ、★米 瑞気・水仙・和、所、四条縄手仲 ★京都句会·16日(火)夕、題、 十三西之町五丁目東淀川郵便局、 ★淀川句会·8日(月) 六時、題 ★南海電鉄句会·18日(木 規則・夢・息抜き、 ★かがみ句会 所

日 兼 会 場 時 題 三題当日発表 一月十三日(土)午後六時 1 スタート 横 安 刻み 虎 寺(妙見さん)電話の一四七八番 南区千日前電停東スグ北側 額 路郎選に限り七時半〆切)

麻 生路

郎

旬

呈 表 柳 席 彰 話 題

麻

路

郎

新

後 松 清

藤 梅 白

志 里 柳

江 水

社

本

昭和三十六年度不朽洞賞優勝者 各題天位を路郎選により、天位に不朽洞賞 ★投句だけの方は郵券三十円封入(〆切は カ年間本社句会全出席者 月十一日) 本社宛。

春 を 賀 奉 る

西橘後不水真丸清 田高柳薫宏風 島 — 田 集 会 生々 梅 子郎 庵乃郎 子子志夫荘瓢花柳方巢 む香

JII 雑 社

★千日前へ会場が変わりました。

阿倍野区松崎町三ノ一〇割京大万 トップ・彼女・番外・実力、所、 倍野句会·20日(土)七時、 目標・スタート・門、所、市電玉 下関市上新地小門国弘半休居、 田古心居、★宇部句会・7日(日 題、再起·相談·銭湯、所、 玉造句会·10日 新町通一ノー一後藤梅志居。 ★にしなり句会・21日(日)六時 造電停南百米大阪信用金庫、★阿 道具、パセリ・笛・祝辞・所 (水) 七時、 題、 *

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可

如何に深いものであるかを知ることの出来る、実に有意義なる。登載された柳人三百余名、集句二千余は続と子の愛情が詠った寿句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書であ「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親ごころ子心を

近鉄特急2階電車でお伊勢さん初詣



伊勢志摩初

特急1時間55分 **片道 200円**

のりば 近鉄名古屋 特急1時間33分 名古屋から ほかに運賃 260円 座席指定特急券 片道 200円

手引に資そうとしたものである。毎十三句について、ひとつひとつ丁重十三句について、ひとつひとつ丁重この新常は財生さんが毎月出して

伊勢志島・賢島へ直通バス

伊勢ゆき定期特急は

宇治山田駅バスターミナルで 大阪上本町から往復700円 名古屋から往復620円 料金はいずれも こども半額

賢島ゆき特急パスに連絡

2階電車 ビスタ・カ

にも似ている。

★本稿は戦後十三年間、

しるさまは凄 ザッ

に掲載され、好評、

読物としてお薦めした

後半に川柳に関する卓

者の

バランな人生批判が、 争にまき込まれ

な戦

近畿日本鉄道

川柳

■近鉄特急のリザーブ・近鉄沿線へのご旅行は ゆき届いたサービスの近畿日本ツーリストへ 東京都干代田区八重洲口国際観光会館

1階TEL231-4131のほか全国に120営業所

若本多久志著 編である。

麻生路即序

風流

五 価 250 円 每日新聞評

tel

生

路

郎

著

川柳の味い方・五百数十句 価二五〇

□五○余頁

発行所

万代西5丁目25

円円号年

川柳雜誌社

の他の雑誌や有別がある。 の他の雑誌や有別がある。 の他の雑誌や有別がある。 **基哲口學大阪75050** 電話 大阪 0 6081

(中海流行)

茶雀梨

の選選選の強選遊

の他の雑誌や句集からひろったが毎月出している「川柳雜誌」五年にもなる。

Printed in Japan

关费50円

昭昭(禁転載 和和 - *

行印制人 取用任治籍区内 年年 年年 月 一 日発行 八〇円 章 九

岁

般作家の維吟を真

投 稿

(計論・ 規 定

募 EFF T * 麻北縣 廣生川生 其略春路

女川

章塔

棚

樟

毎

号

郎巣郎

題

橋弘小 集

高津川

温柳恒

子慶明

集

募







宮内庁御用達 株式会社 本嘉納商店 神戸・灘・御影 賀 正

消滅がまり、海道の